

325

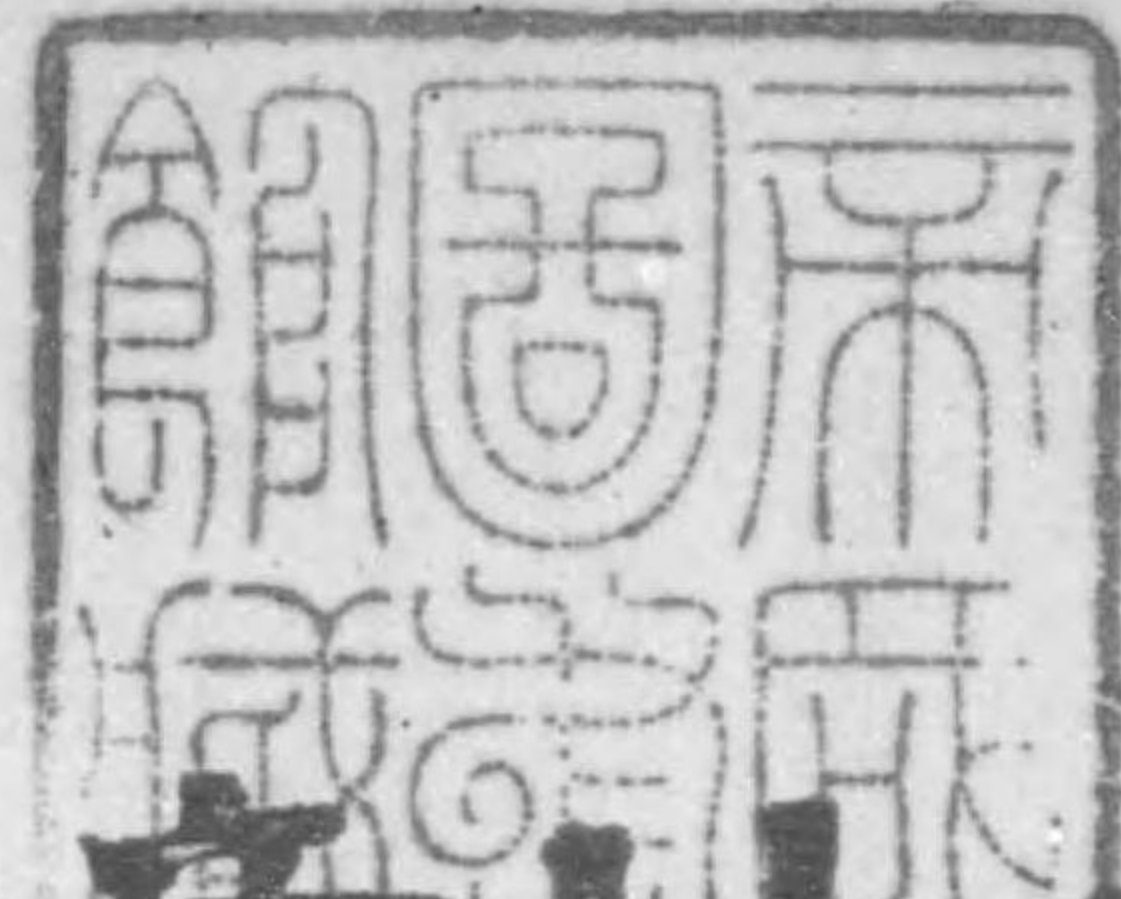
235



始



325-235



# 行奇林禪

編禪洞原管

大正  
4. 4. 27  
購求

序

口を開けば乃ち失ひ口を閉づるも乃ち喪ふ、開かず閉ぢ  
ず十萬八千、至聖の命脉、列祖の大機たる禪林の風規は  
輕忽に摸索するを許さず、超宗越格の正眼を具ふるに非  
ずんば、大匠に逢ふと雖も焉ぞ玄微を悉さんや。本書收  
むる所の奇行逸事百三十有餘篇、多くは、予が叢林留錫  
の當時より今日に至る十數年間の實地見聞と、坊間傳へ  
らるゝ古聖先徳の行履とを提掇して、什麼の葛藤を打し  
了んぬ。素より禪海の淵源を別抉し、那人の底理を剖折

せんとするには、恰も猿猴の影を捉ふるが如く、蚊子の  
 鐵牛を咬むにも似たらん。然りと雖も、人々本具の佛  
 性、本來の面目、豈に凡聖佛魔の別あらんや。先人徒ら  
 に奇を弄して好肉上に瘡を剝る、若し其眞意を領得せず  
 んば、却つて是れ萬劫の繫驢橛たらん。讀者乞ふ、予が  
 杜選を咎めず、妍醜自ら辨別し、以て向上の機關たるを  
 得ば、編者の満足之に過ぎず、幸に鑒せよ。

大正三甲寅年釋尊成道の晩

菅原洞禪識

前篇 荆棘林

聖上陛下と宗詮和尚……………一  
 本光軒伊達自得を打つ……………三  
 三十年間參禪せし伊澤夫人……………五  
 俱胝一指頭の禪……………九  
 木堂和尚の花郎魁買ひ……………一〇  
 梁の武帝と達磨大師……………一三  
 臨濟三頓の痛棒を喫す……………一五  
 墓所内の天幕接心……………一六  
 虎佛通の活手段……………一九  
 獨園一命を所望さる……………二二

上杉謙信と宗謙和尚……………二五

希運禪師と其母……………二六

黃龍の三關……………二八

慈母の訓誡を守つた穆山和尚……………二九

維摩居士の一默……………三三

南泉斬猫の活作略……………三五

悟由禪師と平沼專藏……………三六

大石良雄大死底の消息……………三七

負けず嫌の大石正巳……………四〇

二祖慧可の安心……………四二

五臺山下の婆子……………四四

小兒の如かりし伊達政宗……………四六

超然たる風格の柏樹翁……………四七

一矢に貫かれて豁然大悟……………四八

盤桂禪師の瘡癩治療法……………五〇

秘密を授けし堅光和尚……………五一

黄金百兩に米百俵の布施……………五二

仙崖和尚の貧乏神……………五四

六祖慧能禪師……………五五

無欲の生涯賣茶翁……………五七

生死の關を透得せし兩雄……………五九

奇傑乞食桃水の行履……………六一

發狂と誤られし岡田自適……………六三

柏州和尚と大久保甲東……………六五

鐵文和尚奮勵の動機……………六七

忍性法師無限の法徳……………六八

江川坦庵歸佛の真相……………七一

舌一枚の風外和尚……………七四

天狗に授戒した坦山和尚……………七六

物外和尚と近藤勇……………七七

中篇 舊 窠 窟

高津柏樹の相撲禪……………八三

非凡なる達磨の幼時……………八五

早川千吉郎の算盤禪……………八七

法眼和尚青樓上の三歸戒……………八九

去來無相の兀庵和尚……………九二

雲居禪師の膽力……………九四

高張て母の出迎……………九五

小僧の機智と三代將軍……………九六

東嶺和尚の俳句禪……………九七

將に永訣を告げた田中舍身……………九八

南洲無三の一喝に怕る……………一〇〇

熱時は鬮梨を熱殺せよ……………一〇一

無食界中の兩老漢……………一〇二

法顯三藏の潜然たる涙……………一〇四

黄檗山門頭の扁額……………一〇六

吞海和尚と鐵牛禪師……………一〇八

✓ 竹田黙雷の遊女禪……………一二一

白樂天と鳥窠の問答……………一二二

元良博士の參禪談……………一二三

狼に三歸戒を授く……………一二五

鐵翁和尚の蘭……………一二六

大燈國師の捨身禪……………一二八

天桂禪師の船唄……………一二〇

天臺山上の寒山拾得……………一二一

何ても禪門第一の人……………一二三

慧鬼の膽力鬼神を走らす……………一二五

久保田米僊心眼を打開す……………一二六

慧能和尚の判決……………一二七

嚴冷枯淡の行持……………一二九

一切平等の徳行……………一三一

大徹老漢の般若湯……………一三三

小僧の頓才と赤松圓心……………一三六

雪潭犬山侯に簾を徹せしむ……………一三七

幽靈真龍の一著に度脱す……………一三八

正受庵老人……………一四一

✓ 鳥尾得庵劍道の極意……………一四四

盤桂禪師と王陽明……………一四六

死骸は喰へぬ……………一四七

✓ 恥かしい哩と峨山和尚……………一四八

✓ 鐵舟居士臨終の消息……………一四九

### 後篇 不去來

- ✓ 穆山和尚の遊女贊……………一五五
- 破竈打和尚……………一五七
- 趙州狗子の話……………一五八
- 黒田長政の參禪……………一五九
- 男尊女卑を主張した末山尼……………一六〇
- ✓ 吝嗇の女に説法した默仙和尚……………一六二
- オト咽せたかとコトセン和尚……………一六三
- 宮路宗海發憤の動機……………一六四
- 遊女勝山の禪機……………一六五
- 鹽山稜隊と但馬の月庭……………一六六

- 宿を貸すぞや阿彌陀殿……………一六七
- ✓ 南條博士と鳳潭の話……………一六八
- 吉田松陰の生死觀……………一七〇
- 行履自在の折居光輪……………一七三
- 佛印と蘇東坡……………一七四
- 授業中の高野……………一七五
- 無限の慈悲……………一七六
- 張天覺の無佛論……………一七八
- 蔡君謨髯の安住所に迷ふ……………一八〇
- 山鹿素行禪の修養……………一八一
- 天龍寺龍淵和尚のバイブ……………一八三
- 拈華微笑の端的……………一八四



✓ 冨天棒佐久間將軍を推倒す……………一八五

慧可の決心と正法附屬……………一八六

猫の妙術にて豁然大悟……………一八七

生れたまゝの赤兒となれ……………一九二

✓ 山岡鐵舟の劍道禪……………一九三

横尾賢宗と中村敬宇……………一九四

誠拙伊達侯の頭を撲る……………一九五

女郎の頭髮を剃りし禪僧……………一九八

女子の宣誓と龍關和尚……………一九九

蚊子の飽くに任せし愚堂國師……………二〇〇

慈門尼の偉大なる感化……………二〇一

環溪和尚神官の膽を奪ふ……………二〇三

禪は大力の數を絶す……………二〇四

祖師の西來意と柏の樹……………二〇六

密夫の名を得し曇華和尚……………二〇八

放蕩無頼の平四郎……………二一〇

✓ 放屁の上手は默雷和尚……………二一二

白隠の鼾聲船内を驚す……………二一三

雲門は泥棒の親玉……………二一四

骨まで食つた梅痴和尚……………二一六

✓ 壯快なる蘆津實全……………二一八

繪畫三昧の兆殿子……………二一八

包の中は小判三百兩……………二二一

三好物外の心膽修練……………二二三

良寛禪師と龜田鵬齋……………二二五  
 馬上に人なく鞍下に馬なし……………二二七  
 法衣に赤兒を抱く白隠和尚……………二二八  
 美人に擁せられし水戸黄門……………二三一

附録 塵 中 塵

一、甲斐の祖曉……………二三五  
 二、花の蕾の善信尼……………二四六  
 三、禪機潑瀾たる高岳親王……………二五四  
 四、女禪客慧春……………二六二  
 五、北條時宗と祖元禪師……………二六九  
 六、生死岸頭の美花……………二七六

上、板挿みの殉死……………二七八  
 下、媛が健氣なる最後……………二八一

前  
編  
荆  
棘  
林

## 聖上陛下と宗詮和尚

大正三年五月十三日に遷化せられた前臨濟大學長坂上宗詮和尚は瀾達豪邁の傑僧であつた。常に怪氣桶を吐露して平地に波瀾を捲起したと云ふ様な奇談も多くある、日清戦争の際には従軍布教師として將校間に歓迎され、戎馬の間に大活動をされた事は普く世の記憶に残つて居る處であるが、晩年に至り東海の名刹興津の清見寺に住して幾多の名士を引見接待して居られた。例の率直なる言行、洒落の態度、談論風發人を擇ばざる和尚の奇骨を愛して故有栖川宮殿下の如きは常にお話相手に遊ばされたとの事である。

今上陛下がまだ東宮におはせし折、永らく清見寺に御滞在遊ばした事がある、和尚は毎日のやうにお話相手を申上たのであるが、其後汽軍で興津を御通御遊ばさるゝ毎に、必ずや清見寺を臨まると、然しついで和尚は門前に奉迎した事はない。或日近從

の人々を顧み「宗詮はいつも顔を出さない」と仰せられた。此事和尚の耳に入り爾來必ず奉迎するにしたりとの事である。

或年の事、某知事に向ひ「宗詮は近頃什して居るか」とのお言葉、知事は全く和尚の名すら知らぬのであるから、決して近状を知つて居る譯はない、お答を申上るに窮した揚句知つた顔をしてよい可減な事を申上、直ちに和尚の所へ使を出して「此頃の様子を知らして呉れ」と頼んで来た。和尚言下に「宗詮は元氣旺盛にして壯者の及ばぬ程豊饒して居ります。」と言上を頼んだ。

右の如き因縁で和尚は寺内の蜜柑を毎年献上するを例として居られたが、或時陛下が沼津の御用邸にお出と聞き、和尚早速蜜柑を携へて天機伺ひに出掛けた、沼津驛から人車に乗つて行くと遙か御用邸の方からお馬で此方へ御出でになる至尊の御姿を拜するや、和尚は車から降りてお辭儀をした、やがて通御になつてから車夫は驚いて何を云ふかと思ふと「今殿下はお馬の上から何度も振り向き貴僧を御覧になり、笑

顔をしてお出になりましたよ」と云ひよつたから「左様だらう、彼の方は俺の極々懇意な人ぢや」と言つてやつたら、奴さん眼玉を丸くしてたまげ居つたよ……とは和尚が淺草海禪寺に於ける茶話の一節である。象骨巖高うして人到らずと云ふが、和尚の門下には大姉は一人も居なかつた。

### 本光軒伊達自得を打つ

明治の初年、峭峻の家風を以て天下に知られた本光軒越溪和尚は、若狭高濱の人である、十歳の時、甫めて小濱の常高寺、大圍和尚に就いて出家をした。其若い時分には随分貧乏で常に身に纏ふものは一枚の帷巾、大法要のある時には襟や裾の外に出る處には紙を以て奇麗に貼り繕ふて、上から麻の衣を纏ふのが常であつた。冬になればその帷巾に反古の裏打をして寒を凌いで居つた位。

相國から妙心に移られ天授僧堂の創立する迄は實に波瀾重疊紆餘曲折も極めて多か

本光軒伊達自得を打つ

つた。玉は火を以て試むと云ふが、忽然として突出する高峻なる和尚の柱杖子に因つて鍊へあげられた人は少くない、虎兇を擒ふるの活機自由なること千聖も辨じ難き有様、坐下には坂上宗詮和尚を初めとして數多知名の居士が居る。

中にも維新の勤王家として、山岡鐵舟等と並び稱された伊達自得、初めて和尚の爐竈に投ずべく相國僧堂として參禪を申込んだ、越溪和尚例により惡辣なる鈎竿を垂れて自得を引見するや、入室の語未だ畢らざるに拳を揚げて之を打ち、剩へ其室を投り出して了ふた、傾湫倒嶽の活作略、電轉じ星飛ぶの慨、然るに自得は惜しむべし和尚が言詮不及の的意を了得するとは出來ぬ、非常に憤慢して、やがて荻野獨園を訪ひ此事を語りて曰く「余不肖なりと雖も若い時分より徳川從一位侯に侍して居つた、侯と雖も未だ曾つて余の頭を打つた事はない。又吾を生みし兩親と雖も、我頭に拳を上げた事はない、然るに越溪何物ぞ、我言葉の未だ了らざるに、亂暴にも余が頭に打つとは何事である。無禮も甚しい、吾人老朽したりとは云へ、未だこの拳は老くない積

りだ。どうしても死を決せずは措かない」と、頗る決心する處ある様子。獨園聞て了つて破顔一番「越溪は禪男子ぢや、法の爲には命は惜しまぬだらう。今貴君が之を殺したとて、越溪は決して貴君を恨む様な事はあるまい、併し貴君は後日必ず自己の不明を覺つて越溪の親切を謝する時期があらうと思ふ、漫りに刃物三昧をするよりも、一步退いて篤と工夫して見るがよい」と懇ろに説いて聞かせた。自得も元之れ護法の大器、この語を會して厚く禮を述べ去つたが、爾來斯事に向つて工夫すると數日、寢食を忘れて大死一番底の境涯に達し、白雲影裡に呵々大笑する時節とはなつた。果然！越溪の活手段を慶讃して終生の恩人と絶唱するに至つたのである。

### 三十年間參禪せし伊澤夫人

臭味を脱せざれば上等の部に入る能はざるものは、獨り味噌のみではない。正傳の禪風は千古萬古に變易なきも、禪臭を脱する者の少なきは遺憾の至り、特に婦人の參

禪者に至つて其感を深くするものである。然るに貴族院議員文學博士伊澤修二氏夫人千代子女史は參禪の當初より今日に至る迄凡そ三十年間、よく斯道の蘊奥を極め、全く一頭地を擡んで居られる。小石川は小日向第六天の閑雅なる邸宅に在つて今日猶冥想三昧に耽つて居られる。女史は元來儒者の家に生れて、幼より佛教を嫌つて居られたのが、如何にして參禪するに至りしか、亦其經路について女史は語られた事がある。「或る親類の人に勧められました、初めは鎌倉の洪川老師の室に參じて見ました。其時老師の私に與へられた公案と云ふのは、例の隻手の聲です。私も何だか少しも分らんやうでしたが一生懸命に考へ込んで所解を呈して居りましたが、七年の間と云ふものは何時如何なる事を申上ても一も取上下さいませぬ、お前のは餘程進歩はしたが、まだ一違ふよ」と仰しやるんですよ。

其後、種々考へました結果、禪と云ふても大體に於て「諸惡莫作、衆善奉行」と、通佛教の道理に違ふ譯てはなし、その佛教は即ち世法である以上は、別に六ヶしい公

案を毎日考へて居る必用もないと觀念して、一時禪に參ずるとを中止しましたが、更に夜更け人静まつて密かに考へると、慙うも洪川老師の云はれた言葉や、隻手の聲が氣になつて致方がない、私としては最初より女史は女の道を踏んで行くところに禪の價値があらうと思ふのです。親には孝、夫に對しては貞、子供に向つては慈と、すべて孝貞慈の三つを盡してゆけば、差支ないと思ふもの、又考へ直して何と云ふても吾々は赤の凡夫である、凡夫には手本が要る、女の手本は觀音様がよからう、私は幼少の折聞きましたのに、觀音様は元來女であつて、慈悲を以て世に現れたと云ふことを知つて居るので、夫以來毎月十七日には淺草の觀音に詣ずる事に決めまして、雨が降らうが風が吹かうが、必ず參詣して居りました。

或時偶然にも下谷の高徳寺の前を通りますと「臨濟錄提唱」と云ふ大きな看板が掲つて居りますので、近所の人に聞くと、師家は今一休として有名なる紫野大徳寺の管長で、牧宗と仰しやる方、私は是非一回お目にかゝつて平素の疑問を晴らしたい

ものと、翌早朝身を淨め、衣服を改めましてお伺ひすると、老師は紫の法衣を召して木蓮か何かを活けて居られる様子、それで私は一切の疑問を打明けましてお話申上ると「妙な事を云ふ女ぢや、一體お前は何處ぢや」と仰しやる。それより淳々として説かるゝ老師のお話を承つて、初めて孝貞慈の三つを完全にやらうとするには、第一に其根本たる自分の迷ひを取り去つて了はねばならぬのと云ふとが分りました。

此迷ひの根本を坐斷するには、矢張隻手の聲が聞えぬては眞物ではない老師は「隻手微妙の音聲……」と仰しやつて示されましたが、爾來三ヶ年の間は老師の下に通ひつめましたよ！と、熱心なる態度、爽かなる辯舌此處清酒なる邸宅も時ならぬ禪風の通ふを覺えた。かくして女史は這箇の大事を透過するに至つたのである、その歌にありと思ひ無しと思ふも迷ひ哉

唯そのまゝを其儘にして

### 俱胝一指頭の禪

俱胝和尚は、平生人の所問に對しては一句も吐かず、只一指を堅つるが常、文字より來るも一指を堅つ言詮より來るも一指を堅つ、一指甚麼の功德がある。畢竟するに八萬四千の法門も、五千餘卷の經文も、只此一指頭を以て説き盡さるゝ妙用があつた。或時に外來の居士有りて、和尚に這箇の玄底を叩いた。偶々近習の小僧、走り出て、和尚の例に慣ひ、可愛き一指を堅て、參禪の客に示した。間一髪を容れず和尚は小刀を執るより早く、小僧の堅てし件の指をスバリ切り落して了ふたのである。小僧痛さに耐へず泣いて室を出んとした、和尚背後より「小僧、佛法の的意は」と、問ふた。小僧痛さを忘れて切られし指を堅てた、瞬間忽然として大悟した。和尚遷化に臨み會下の衆僧に示して曰く「納天龍より一指頭の禪を得て、一生受用不盡」と。諸禪者各自の指頭を徹見して如何と參究すべきである。



### 木堂和尚の花郎魁買い

木堂和尚は遠州新居町龍谷寺第九世の祖である、尾州犬山町輝東庵主願盛和尚と同じく東嶺禪師に參じた。人と爲り機鋒峻嶮磊落にして、物に滯礙せず、一生雲水に了つた實に近世の風流佛である。

和尚ある年江戸に入らんとて品川宿を通過した。其時突如として一樓中より襦袢姿の一女郎が飛び出て「木堂さん遊んで下さいよ」と云ふ。和尚恍として顧みて曰く「手前は誰ぢや」女郎秋波一番「私は和尚様の檀家樹屋十藏の娘であります、何卒助けると思ふて今宵は此樓に泊つて下さいまし」夫ぢや宿らう」と、伴はれて圓頂黒衣のまゝ女郎の室に入つた。然るに夜は森々と更け渡り一更二更の鐘の響に流石畫を欺く高樓も人靜つて、四圍森閑、女郎堪り兼ね「和尚様お休み下さい！」と促した。和尚嚴然として「手前は寝るが商賣、己は坐るが商賣ぢや、構はないからゆつくり寝るがよ

い」と云うて終宵女郎の枕頭に兀座す、翌朝に至り勘定を問へば、女郎「五百文頂きます」と云ふ、和尚乃ち一朱の札を與へしに、女郎は端錢二百二十五文を出して「和尚様是は私に下さい」と和尚眼を怒らして曰く「手前はさる根性玉だから此様な處に何時迄も居るのだ、人間は正直でなくてはいかぬ」と之を叱す、女郎恐れて叩頭して居る中にすたくと出て行く、女郎周章狼狽「和尚様々々々あつりを……」と追懸ければ「お前に遣る！」と云ふたまゝ後をも見ずに去つて了はれた。

和尚は亦妙な風があつて、日本一とさへ云へば誰彼の差別なく逢ふと云ふ有様、或時江戸滞在の次で、吉原に遊び廓中第一等の花郎魁に逢ひたいと、真逆品川で女郎屋の眞味を掬した譯でもあるまいが今の大文字樓の如く其頃廓中第一の青樓を撰び、手引に依て其樓に至れば、生憎第一等の花郎魁は今日店を引き、親の佛事を營み居るに付、御客は一切お断りとの事、和尚曰く「幸ひだ、柄がお經を讀んでやるから逢はせよ」と、爰に樓主は花郎魁に此由を告ぐると、彼女は大ひに喜んで早速己が室に和尚

を迎へた。和尚悠揚として室に到れば果して佛事の仕度萬端滞りなく出来て居る。それでは早速回向をしてやるとして大聲を張りあげて誦經に餘念がなかつた。

彼女は流石日本一丈ありて、此僧凡ならずと見破した、直ちに精進料理を申付け、立派な膳部を以て供養をした、和尚食し了りて其膳をつくつく眺めて曰はるゝには

「柄は今日迄諸所の供養に逢ふたが、未だ會つて斯の如き見事なる膳腕を用ひられたのが初めてぢや、日本一の女郎とは聞いて來たが、膳腕もこりや日本一ぢや哩」と、如何にも心地よげに食事を了つた。彼女が曰ふには「是はさる大名に貰つた品、數多くありますから、御所望とあれば差上ませう、併し如何してお持ちになりませうか」と、和尚が非凡の風采、脱酒の境涯にいたくも信服したる彼女は、全く平素の俗界を離れたる心地、和尚はいと無造作に「何も面倒などはない、一寸荷造りをして彼の靈岸島迄持つて行き、遠州新居宿龍谷寺行として呉れ、ば届くのぢや」と卓然たる態度。彼女の喜び譬へんやうもなく、かゝる名僧によつて親の佛事の營まれしとを喜び、其日

は數多の布施を呈して、翌日早速膳腕をば箱入となし、和尚の云ふが如く遠州行として靈岸島へ差出した。目下尙龍谷寺の寶物として保存せられて居るとの事である。

### 梁の武帝と達磨大師

梁の武帝、姓は蕭、名は衍、字は叔達、却々の聰明で、初め梁公に封ぜられ遂に高祖武帝と稱せらるゝ様になつた。殊の外、佛法に歸依し自ら袈裟を搭けて放光般若經涅槃經等を講ぜられた、時に天華亂墜して大地黄金と變じたなど云ふ奇瑞が傳へられて居る、天下に詔して寺を建て僧を度すること無數であつた、故に佛心天子と崇めたと云ふ事である。

此時は既に佛法支那に渡つてから四百餘年を経過して名相の研究隆盛を極め其弊として、末枝言端に涉つて却つて本源を忘失する有様であつた。達磨大師之を嘆かれて教外別傳不立文字の大法を悟了せしむべく一葉の葦の如き小舟に掉し得々として支那

廣州に着せられたのは、普通八年（此年大通と改元）九月廿一日であつたと云ふ事である。武帝、非常に喜んで特に使を以て宮中に招待して先づ「朕は多くの寺を建て、又僧を度したが何程功德がありませうか」と問うた、磨曰く「無功德」と一喝せられた、有所得の念を以て事をなす時は總べて無功德である實に以外の答へに從來の妄想袋に大影響を及ぼし、取り敢へず彼の有名なる問答となつた。「如何なるか是れ聖諦第一義」然らば佛法のギリ／＼のあり難い即ち極妙窮玄の處が承りたいと問ひ詰めた、磨曰く「廓然無聖」有り難いと思ふ一念、何處にかあるガラリとして八面玲瓏、聖の聖とすべき者は無い、武帝が一物珍重の妄想袋を叩き潰さうとせられたが、可惜乎帝曰く「朕に對する者は誰ぞ」と塊を追ふ狂狗の如く直に言葉尻を捉へ、廓然無聖と云るゝが現に此方と相對して居る貴僧は何者である、大聖釋尊より二十八代の祖師と仰がれ大事了畢せられた、尊き聖人ではありませぬかと皮肉なる小理窟を仰せられると「磨曰く不識」左様な下らぬ事は識らぬと刎ねつけられた無言不識の妙味、不知

最も親切な慈悲落草の手段が解らぬと見え「帝契はず」とある、横綱と禪擔ぎとは相摸がとれぬ「遂に江を渡つて少林に至り面壁九年、因縁の熟せぬ時は致し方がない、遂に揚子江を渡つて魏の國に入り、嵩山の少林寺で九年の間、三昧王三昧に任して面壁打坐、一個の慧可を得て佛祖の心印を傳授せられた、武帝は其後達磨大師を追憶するの餘り碑文を撰して「嗟呼之に見ゆれども見ず之に逢へども逢はず今も古も之を悔ひ之を恨む朕は一介の凡夫なりと雖も敢て之を後に師とす、心有なれば曠劫凡夫に滯り心無なれば刹那に妙覺に登る」と、少しは眼鼻が解つた様でもある。是は決して達磨と武帝にのみ預け置くべきでない、取て以て吾人の鏡にすべきである。

臨濟三頓の痛棒を喫す

支那の鎮州、臨濟院に住せられたる惠證大師、諱は義玄と云ふ、若年行脚の時、黄檗斷際禪師の會下に在て道を求むる最も切なる志かあつた。或時黄檗禪師の上堂に

臨濟三頓の痛棒を喫す

逢ふ、臨濟問うて曰く「如何なるか是れ佛法的々の大意」と、黄檗禪師口を開いて有とも言はず、無とも道はず、只慕向より打つこと二十棒、三度佛法的々の大意を問ふて、三度、三頓の棒を喫した。即ち六十棒を與へられたのである。

臨濟年僅かに十六歳、道を求めて太だ切、されども未だ六十棒頭の味を會することが出来なかつた。悲痛措く處を知らず、黄檗を辭し、黄檗の指揮を受けて、高安太愚禪師の處に到つた。太愚禪師問ふ「黄檗何の言句が有る」と、臨濟答へて「三度佛法的々の大意を問うて三度棒を喫す、知らず、過有りや、過無しや」と、太愚禪師曰く「黄檗恁麼に老婆親切、汝が爲めに微愾なることを得たり、更に來つて有過無過を問ふと莫れ」と、此の一言下に於て臨濟大悟通徹したのである。斯くして臨濟は遂に黄檗の衣鉢相續することを得た。

### 墓所内の天幕攝心

「元日の見るものにせん富士の山」と云ふ句があるが、往昔鎌倉の佛光國師は師を尋ねて東海道を往來すると廿一回、未だ曾て富士の雄姿を見たとがなひとの事である。それは昔の語草、今は大正文化の御代に言思迥絶、活納僧の自分を發揮して、東京は神田區美土代町に大日本禪學道場の看板を揚げ、全國十數ヶ所に參禪の道場を築き、其師家として赤旛を翻へし、三千の居士大姉を接待しつゝある南天棒中原鄧洲老漢、七十六歳の今年迄、東海道を往來すると將に三百回以上に及んで居るが、佛光國師同様、未だ富士山を眺めたとがなひ、そは始終時間の都合上寸閑を惜み夜汽車でばかり往來するからである。老漢曩に山岡鐵舟の請を容れて、初めて東京市に來錫專門道場を開いた時の事を記者に話された。「參禪の道場と云へば名は立派ぢやが、僅か四疊半に二疊の破れ部屋、兩戸すらない見る影もなき牛込市ヶ谷の觀音堂、衲も一衣一鉢の着た切りて乗り込んで來た。さゝいよ、晋山式をやることになる、山岡は五升樽を吊して來て、丸飯に澤庵漬、四ッ谷からヒ、燒茶碗を買つて來ては祝盃を擧げると云

ふ騒ぎてあつた。その時の祝語は

大道元來平似砥。不<sub>レ</sub>移<sub>二</sub>寸步<sub>一</sub>。據<sub>二</sub>狷林<sub>一</sub>。

白崖幸有<sub>二</sub>鐵舟在<sub>一</sub>。一點法燈放<sub>二</sub>瑞光<sub>一</sub>。別々

三千劍客今在<sub>二</sub>何處<sub>一</sub>。獨許莊園致<sub>二</sub>太平<sub>一</sub>。

句中瑞光とあるは、瑞光山と云ふ山號を取つたのぢやが、この見る影もなき四疊半に四周簾を垂れ下げて、常在攝心をやつて居た。今日なればこそ、有志の人達が専門の道場を建て、呉れたが、當時の事を思ふと勿體ない位、山岡も例の四疊半に毎日通つて来て、専心打坐をやつて居る、膝を容るゝ餘地だになき破れ堂内に僧俗併せて三十餘名も居つた。坐席すらないので、堂庵の隣りなる戸田家の墓所、その石碑の上に天幕を張つて地面に藁を敷いては坐つて修行をする、二ヶ年の星霜はかゝる境涯であつたが、そこに眞の禪風が擧揚されたかも知れぬのぢや。寒風凜烈の間、臘八攝心もやつたのぢや。

蒲菴如意結伽寒。咬齒鼓牙夜已闌。

雪齡凍飢無<sub>二</sub>出路<sub>一</sub>。瑞光依<sub>レ</sub>舊<sub>二</sub>滿林<sub>一</sub>巒。

と云ふのが、その時の感懐であるが、禪僧はこの意氣がなくてはならぬ。

### 虎佛通の活手段

狼玄樓、虎佛通と稱して久しく洞上の叢林に鳴り響き、その名を耳にしたゞけても初行脚の雲水は縮み上る位。玄樓和尚は龍滿問厚の神足、即ち老螺蛤天桂老人の嫡孫であつて、家風森嚴格別の手段を具へ、高齡九十にして昌んに化を揚げられたる大宗匠なるとは普く人の知る所、而も此玄樓和尚と併せ稱せられたる佛通和尚も素より凡骨ならざる事は勿論であるが、玄樓の演法一世を風靡するに反して、佛通の事蹟の世に喧傳せらるゝもの甚だ少ない。

和尚の郷里俗姓等は隨て之を詳にするとは出来ぬ、一説によると、和尚の前身

は關東の武士であつたとも云ふが、後に東門慧西の會下に侍して運水搬柴の勞を取つた、その投機の偈と云ふのがある、

此事懸懷十八年、幾回得力未安眠、一呼一説明了々、咄却徒前滿肚禪、

と其苦辛の程をも察せらるゝてはないか。斯くて數年飽參の後は請せらるゝまゝ山城の乙訓郡物集女村の永昌寺を董して化を京畿の間に布かれたのである。

當時は玄樓既に逝いて、其上足たる風外老人が出世の當初、亦臨濟の方は例の峻嚴一代に響いた鎌倉の誠拙老漢あり、伊豫の龍潭寺には行應老人惡辣の手段を以て學人を鉗鎚して居られたが、佛通の道業四邊を拂ひ、學德隠れなく爲めに多くの公卿、大名等の來訪、門前市を爲すと云ふ有様、佛通和尚其煩に堪へ兼ね、孤錫瓢然として京を去られたのである。

文政六年の春の夕、京より攝州へ下り有馬へ着いた。奇岩孤松の風流を愛て、錫を留むること二旬、時に武庫郡灘村に柴田某と謂へる禪客、碧岩院徹底了也居士と號し

て朝夕兀坐三昧、而も近郊珍らしき富豪であつたが、深く和尚の徳に歸依して、新に有馬郡道場村生野の山中、幽邃なる地を撰びて一字を建立し、和尚が聖體長養の道場に寄進した。

和尚は此處に移つて碧岩窟と號して居たが、蛇の道は蛇の喩、此事諸方の叢林へ知れ渡つて、天下の雲衲先を競ふて掛塔を申込む、山中の隱窟は時ならぬ大禪窟と化し去つた。然るに和尚は常に怒罵瞋拳を以て法を擧したので、雲兄水弟の留まるもの僅かに二三、されども中には佛乘慈憫の如き偉丈夫も出來たのである。

佛通和尚一代の中に尤も珍らしいことが二つある、一は和尚の武術であつて、一はその慈徳禽獸に及んだ事である。和尚素是れ劍道の達人前後左右より一時に打つて掛る武士の眞劍に對して恰も電光石火の活機、如何にしても其身に觸るゝ事が出來なかつたので、遂に三田藩の武士は和尚の門に投じて劍道の指南を請ふに至つたのである。併、和尚の老骨を流るゝ血汐は温にしてよく禽獸も慣れ親んだと云ふ事實が傳へ

られてある。

元來この碧岩窟の在る生野の山中は狼の多く棲んで居るので有名な所であるが、和尚が碧岩窟に坐して居ると、時々山中の老狼が入つて来て、或は野花を捧げ、或は果物を獻じて其禪榻を賑はして居つたと云ふことである。

### 獨園和尚一命を所望さる

明治の初年に、排佛毀釋の聲が一時愚人間に起つた事があるが、其時に當りて大いに力を盡されたのは、彼の京都相國寺の住職となつて明治二十八年八月十日七十七歳で入寂せられた、荻野獨園である。彼れは人も知る如く近代稀れに見る處の才能智識と稱せられて居つた、獨園曾つて麻布の天真寺に居た頃に、或日所用の爲め門を出やうとするを、五七人の壯士連がやつて来て「獨園和尚に逢ひたいから取次いてくれ」と恐ろしい見幕「獨園は柄であるが一體何の用があつて尋ねて來たのであるか」と云

ふと、壯士等は暫く逡巡として居つたが「さればなり、和尚は乃ち吾黨の外道、僕等の本望を達するには此上なき邪魔者ぢや、僕等は耶蘇教を奉ずるものであつて、此度何とかして佛敎を撲滅したいのである。就ては和尚を生かして居つては到底駄目だから、今日和尚の一命を貰らひに來たのである」と一言鼻孔を穿過せんとする、獨園は從容自若として「それは亦た誠に容易い用ぢやの、此の首が欲しければ何時でもやるから、さあ早く斬つて持つて行け」と、破顔一番、壯士等も相顧みて、默然たりしが一人減り二人減りして、終に皆退去して仕舞た。

其後和尚は九州地方の末寺の荒敗に歸するのを非常に憂ひて、自ら錫を日向大隅薩摩の地方に飛ばして盛んに道俗を教化して居つた。折しも其十年の正月より鹿兒島に暴徒蜂起して、人心頗る騒然たる有様であつた。時に和尚は亂を避けて一寒村の或る信徒の別墅に居られた、暴徒等は和尚を疑て政府の間諜ではあるまいかと思ひ、餘程探偵を嚴重にしたさうである。或夕偵者が窃かに壁の破れから中を窺ふて見ると、和

和尚は侍者と共に香を焚きて静かに坐禪して居る。次の夜また之を窺ふと、こんどは和尚は筆を取つて盛んに何事か認めて居た、偵者は大に怪しみて早速之を報じたのである、すると翌日暴徒等は兵數人を率ゐて來て、和尚の居を圍み、白刃を擬して和尚に迫つて云ふには「夜間に記せしものは何んである」と詰問うた。

和尚は泰然として其鹿兒島に來りし意を述べて、然る後に且つ答へて曰く「老衲はかつて我宗祖師の列傳を著さんとして久しく心掛けたるも、常に東西に奔走して居りし爲めに未だ其意を果す事が出來ず、誠に口惜しく思ふ故、今亂を避けて此家に來り、之を編述して居るのである」と、云つて彼の草稿を取り出して示すと、暴徒等は漸にして、其疑解けて其場を去つたと云ふとである。今存する處の「近世禪林僧寶傳」なるものは和尚が其時の草稿を上梓したものであるが、大死底の人活する時は其一行、凡て格外の機用を現出する、苟も禪僧たるものは籠頭を脱するの心掛がなくてはならぬ。

### 上杉謙信と宗謙和尚

上杉謙信がまだ佛門に入らない以前、輝虎と云つた血氣昌んの頃、頗る禪に志して普く諸山の知識を訪ひ、大ひに所得ある積りて、内心甚だ慢ずる所があつた。偶々米澤林泉寺の宗謙和尚が、其機鋒甚だ鋭いと聞いて輝虎は心窃に思へらく「宗謙機鋒鋭なりと雖も、そも如何程の事やあるべき、吾こそ其鼻を挫ぎ呉れん」と、乃ち微服して他の參禪者と共に林泉寺の道場へ詣つた。時恰も和尚は「梁武帝達磨初相見の話」を提唱して舌頭の峭峻なると秋霜の如く、法戰將に關なるの時、流星にも似たる眼光は早くも輝虎の微服姿に飛んで來た。

提唱の終へるを遅しと待ち構へた輝虎、直に丈室さして入室獨參を申込んだ、輝虎の右足一歩室に入るや否や和尚大喝一聲「達磨不識の話什麼と合點が參つたか」と切り込んだ、輝虎不意の一撃に答へる術もなく擬議する様子を見て取つた宗謙老漢、破



顔一笑「大守は平生よく御弄舌なされる様子、何故説破せざるにや」と、心憎き迄に恚然たり、輝虎背汗を覺ゆるのみ、始めて和尚の定力に心服した。和尚は静かに輝虎を顧みて曰く「此事を會せんと欲せば須らく大死一番し來れ！」と、輝虎退いて自ら參究するを數ヶ月、大ひに省悟する處あり髪を剃つて入道し、曩に輕心慢心を以て大法を求めんとしたるの非を誨ひ、改めて宗謙和尚の門に投じた。

和尚は早速輝虎が熱心なる求道の意氣を容れて之に其名の「謙」の一字を與へ、名を謙信と改稱し號を不識庵と云つた。蓋し不識庵は達磨の不識に因つたとは勿論である。

### 希運禪師と其母

黄檗の希運禪師が幼きとき佛門に入り師を尋ね道を訪ひて、遠く江西に學んで居た。然るに禪師の母は恩愛の情堪へ難く一度我子に逢ひたいと泣き暮して遂に目を泣き潰

して了うた。夫れからは結縁の志を發して常に行雲流水の行脚僧を迎へ宿泊接待して僧の足を洗ふことを例とせられた、それは我子の足に瘤があつたので之れを見出されんが爲めてあつた、禪師は二十年目にして郷里を音づれられた、變り果てたる我が家、我が母、如何に心を動したることであらう。

然るに流石は禪師である、事の存する處を知て瘤なき足を二度出されたのである、吾れ希運なりと告げたならば定めし迷ひに迷ひし恩愛の絆に纏はれやせんと落つる涙を忍びつゝ親子の名乗をせずに出立せられた。禪師は暫らく行かれると同參の知人に逢ふたので蔭乍ら母上に逢ふた喜びを物語られた、然るに其僧、彼の家に至り此事を話たので母は大に驚き狂氣の如く杖にすがりて跡を追ひ福清と云ふ渡場に至れば日は暮れて禪師は早や中流に乗出して居られた、母は大聲に叫びつゝ夢中になりて遂に河中に陥ち入つたのである。禪師は幽かに我名を呼ぶ聲を聞き急ぎ船を返し松火を取りて見るに母は早や溺死したのであつた。禪師叫んで云く「一子出家すれば九族天に生

ずと若し然らずんば諸佛は妄語をなす」と、次に偈を擧して「我母多年迷自心。如今華開菩提林。當來三會若相值。歸命大悲觀世音」と、大喝して炬を擲げられると、時に焔の中に亡母生天の現證が見えたと傳記にある。

### 黃龍の三關

黃龍慧南禪師が學人を接待するのに生緣、佛手、驢脚の三問を設けた、禪宗頌古聯珠通集第三十八に「室中常に僧に問ふて云く人々盡く生緣あり上座の生緣何の處にかある」と、是れ第一問也、頌に「一生緣語あり人皆識る、水母何ぞ曾て鰕を離れ得ん、但だ見る日頭東畔に上ることを、誰か能く更に趙州の茶を喫せん」次に「却つて手を伸べて云く、我が手何ぞ佛手に似たる」是れ第二問也、頌に「我が手と佛手と兼ね擧ぐ禪人直下薦取せよ、干戈を動せずして道ひ出せば、當處に佛を超え祖を越えん」と、次に「却つて復た脚を垂れて云く、我が脚何ぞ驢脚に似たる」是れ第三問也、頌

に「我が脚と驢脚と並行し、歩々無生を踏著す、會得すれば雲收まり日卷く方に此の道の縱横なるを知らん」と、平生此の三問を發して學人を試むるに三十餘年能く其の旨に喫ふものなく、天下の叢林、之を目して黃龍の三關と稱したとのことである。

### 慈母の訓誡を穿つた穆山和尚

久我侯、三浦中將、渡邊無邊、鼓少將、大谷嘉兵衛等が親しく師事せられた禪門近代の傑僧、前曹洞宗管長直心淨國禪師西有穆山和尚は、實に思ひ切つた苦學をせられた人である。

和尚は文政四年、陸奥國八戸在港村に生れた。幼い時から他の子供とは異つて頂門上一隻眼を打開して居た。九歳の時である、母親に連れられて願榮寺と云ふ眞宗のお寺に參詣し、法堂前に掛けてある地獄極樂の圖を見て「如何なる人が地獄に行きますか」と母親に尋ねた、母は何氣なく「お前の様ないたづら者が行くのですよ」と答へ

ると、「それではお母さんは何處に行きますか」と尋ねる。「お母さんはお前達を可愛がるために、知らず／＼罪を造つて矢張地獄に行きます」と答へられた。其時和尚は子供心にも不思議に思ふて「私はいたづらだから地獄に行き、「お母さんは私達を可愛がる爲に地獄に行く」とすれば、極樂へは誰が行きますか」と、直下に倒退三千の間である。母親は「お前が尊い和尚さんになれば、両親は勿論、親族迄皆極樂へ行かれます」と、密々たる慈悲の訓誨はいたくも和尚の胸底に徹して、「お母様を彼の恐ろして地獄に遣るとは出来ませぬ、何卒私を出家させて下さい」と、突然母親に希うのでつた。其時「お母さんを極樂に遣る様な尊い和尚様になるなら出家も許しませうが、憐れも地獄へ引込ひ先達になりさうだから……」と、云つて中々許さない。「屹度お母様を極樂にやる大導師になります、是非出家させて下さい」と押し立ての願望、「夫程迄に思ひ込んだ事なれば許しませう」と言ふて、遂に其菩提所なる長流寺の金龍和尚に就いて出家得度するに至つた。

其後、十四歳の折金龍和尚の病死に逢ひ、直ちに志を立て、江戸に出て、駒込吉禪寺の學寮に入つた。其時の苦學は實に言詮不及、書を購うに一金の貯へもなく、寒を凌ぐにも一着の直替すらない。依つて書は下谷池の端なる雁金屋と云ふ佛書店の店頭腰に掛け、丁寧頁を操つては頻りに暗んずる、此有様を見て書店の主人は和尚の篤學に感して、新本珍書を學寮に持歸るとを勧められたので、和尚の喜悅譬ふるに物なく、爾來意の如くに佛典漢籍を抄臘する事が出来た。

和尚は好機を逸せず、一方學寮内に佛典の提唱を聴き、更に門前なる菊池竹庵の門に參じて漢籍を學んだ、或夏の日の事、竹庵先生は暑氣に堪へ兼ね、素裸になりて講義を初めた、不圖和尚の汗を拭ふを見て屹驚いたし「何ぢや、貴僧はこの土用中に綿入を着て居られるのか、單衣は無いか、ハ、ハ、先生は赤裸で弟子が綿入とは面白い對照ぢや」と手を拍つて笑はれたが、顔々相對する處定めし清風室内に充ちし事であつたらう。

當時和尚は、晨旦三時に床を蹴つて町内を托鉢して廻り、其施物を以て自炊を續けると三ヶ年、其間は全く麻の古法衣一著を以て押通した。其後、牛込鳳林寺の住職となり、三十歳の時故郷に錦とばかり、母親に安心せしめんと、一旦歸郷するや、こはそも如何に、母は喜ぶかと思ひの外「お前は少しばかりの學問をして、立歸るとは何事だ、成程狭い未開の奥州ではお前位の學問でも自慢になりませうが、私はお前に地獄の先達させん爲に出家を許したのではない」と嚴然として鬪を跨がせぬ。和尚は大いに後悔して直ちに踵を廻して兩行脚の途に就いた。

其行先は關東小田原海藏寺、月潭和尚と云ふは當時に於ける洞門無二の老知識、峻嚴辛辣の家風に僻易して、二年と止まる者がない位。和尚は特更に月潭老漢の機鋒を喜んで其門に投じたのである。時に三十九歳、後に駿河の如來寺に移られたが、貧寺にして食物もない有様、枯淡の間に十四五名の雲兄水弟を育英しつゝ、自分は早曉箱根八里の峠を越えて日没後如來寺に還り、座下の學徒に講義を聽かせて、初めて開枕す

るを例とした。爾來、雨風雪の差別なく月潭の門に往來すると前後十二年間、大死一番底の覺悟ありて初めて荆棘林を透過し、凜々たる孤風を千古に垂るゝの活三昧に住されたのである。

明治三拾四年の春、八十一歳で大本山總持寺の主席を蓋す、同三十八年秋、辭して横濱西有寺に退隱せられ、同四十三年十二月四日九十歳を一期として眠るが如く遷化せられた、和尚が九十年の應機接物、天下人の舌頭を坐斷して七縱八橫の輪鎚も實に幼時に於ける慈母の訓誡を遵奉せられた賜物と謂はねばならぬ。

### 維摩居士の一默

居士林中逸群の大士は維摩居士である。佛在世の時天竺の毘耶離といへる町に住して居たが或時病氣に罹つた。その病氣を縁として示すに大乘の妙法を以てし、自ら癡に從ふて愛あるときは我が病生ず、一切衆生病あるを以て是の故に我れ病あり、一切

衆生病まざるを得ば我が病滅す」といふて居られた釋尊は會中より病氣見舞の特使を撰ばれたが、聲聞の弟子も菩薩の弟子も、居士の禪機に吞まれて皆な盡く辭退に及んだので、トウ／＼文殊菩薩が行くことゝなつた。見舞の時の挨拶こそ實に古今の大公案である、居士は菩薩の來るを見るや、「善來文殊師利、不來の相にして來り、不見の相にして見る」と言ふた、好くこそ御出下された、だが眞如界中に去來は無い筈、佛性本より相貌の見るべきは無い、故に菩薩は不來の處に於て假りに來儀の相を現じ、我は不見の地に於て暫く相見の禮を行ふことであると、流石は文殊菩薩之れに對して「是の如し居士若し來り己れは更に來らず若し去り己れは更に去らず、所以は如何んとなれば、來者も從來する所なく去者も所至なし、見るべき所の者は更に見るべからず」と答へられた。去ると來るとは空中に鳥道あるが如くにして縱横自在なるも、其去來のそのまゝがソツクリ寂然不動である。

以上の問答を端緒として、種々様々なる商量があつて、最後に居士は入不二の法門といへる第一義の問題を提出せられた、法自在菩薩より文殊菩薩に至る迄の無數の菩薩が各々注脚を試みて、文殊菩薩は居士に向て「我等各自に説き已んぬ。仁者當に説くべし、何等か是れ菩薩入不二の法門」と問はれた、其時居士は默然として言なし、是れが維摩の一默とて有名なものである。説き去り説き盡して終に默に歸す、默は是れ宇宙の實相、修證の源泉と工夫せねばならぬ。

### 南泉斬猫の活作略

昔 支那南泉山下に西瓜畑よろしくと云ふ程、多くの凡僧輩集り居る處へ、一疋の猫が飛び込んだ。凡僧輩「是の猫に佛性ありや將た無しや」と、喧々囂々、蜂の巢を啄いたが如く、時に山主の普願老漢出て來り、其猫兒を引つ攫み、明晃々たる一刀を振り翳して、「道ひ得ば即ち斬らず」と、凡僧輩、何んと道ふて好いやら、燒物の巾着て口が開かぬ、泉、猫兒を斬却して兩段となすと、面白い哉。

是れ所謂、妙な話なれどもくだらぬことに兎や角騒ぎ廻る、今の若い者には好箇の良薬、大臣が豪いの、乞食が賤いの、金持が美しいの、貧乏が詮ぬの……「何をくよく川邊柳、水の流を見て暮らす」底の小人輩には實に一服の清涼劑である。

### 悟由禪師と平沼專藏

殺人刀活人劍は上古の風規にして、亦今時禪門の樞要である、人天の命脈は一指呼の間に断するの手腕は素より禪の本領。茲に當代屈指の資産家として知らるゝ平沼專藏、或時關西線に於て森田悟由禪師と偶然同車した、豫て知己の間とて種々世間話をして居る中に圖らず自分の懺悔話をした「私も三十歳位までは、酒も呑み、煙草も喫し、道樂のあらゆる事を爲透したが、貧乏の味が骨に徹してからは、何でも人生は金が大切と存じまして、凡ての道樂は断然止して朝には早く起き水を浴びて身體を清潔にし、神佛にも信心して、仕事をやりました。それからまづどうやら人に知ら

れるやうになりまして、今年は六十四であります、冷水を浴びる事丈は止しました、追々佛教の法義でも聽問して、後生を樂む考てあります」と、話しをした、禪師は其間黙然として聞いて居られたが、やがて侍者の人々を顧みて「世間の不淨財を得るにもこれ程の苦心を要することだ、况んや諸子等が佛祖正傳の大法を獲得するには、容易な苦心では得らるゝものでない、並大底の修行では駄目な事ぢや」と掣電の機、酬對の妙、他山の石を以て直ちに自家の座下に接得の慈鋒を向けられた。之を聞かれた平沼專藏、低頭佇思、全身冷汗を覺えて、爾來大ひに得るところがあつたと、常に人に語つて居られた。

### 大石良雄大死底の消息

大石良雄は武を山鹿素行に習ひ、禪を盤珪和尚と云ふ時の禪匠に參じたのである。又後に良雪長老にも就いて提撕を受けられた。

大石良雄大死底の消息

時恰も江戸に於ける主君淺野侯が大御所松の廓下に於て吉良上野介に刃傷、五萬三千石は御召し上げ、其日の内に切腹申付けられたる事件が國元に達したので、城内は上を下への鼎の沸くが如く、振天動地の大騒動である。國守の菩提所なる花岳寺住職惠光和尚は弟子良雪長老を従へて、城代大石の邸に見舞せられた。良雪長老は弱年なれど素是れ金鞭を握つて重城に入るの作家、時に意表外の活手段を施して他の舌頭を坐断するの妙機がある、心密に思へらく、大石は身一國の城代なれど、普く一世の名士として隠れなき文武兩道の達人、殊に盤珪和尚の鉗鎚を受けたる禪者なれば、擊石火裡に生死を分ち、閃電光中に殺活を辨ずる底の、活潑々地の問話あるべしと、油断なく耳を澄して期待せしに、豈圖らんや、

「方丈には能くこそ御來駕下されました、此度の椿事には拙者も實に當惑の外は御座らぬ」と、盲龜の浮木を探るか如き態度に、良雪は聞捨になり兼ね、次の間より「此場に臨んで當惑とは何事ぞ」

と大聲叱呼、白雲を喝散し、滄海を踢躪する底の一著を擧した。

流石に大石良雄、後に禮を盡して良雪長老を請じ、懇懇に挨拶を爲し、

「過刻御入來の折、貴僧の一言、誠に大石愧入る次第、貴僧に於て今般の事件に就き、御好案が御座るなら承り度く存ずる』

と言ひしかば、良雪長老平然として

「君辱めらるれば臣死す、是が貴殿今日の御決心で無ければならぬ、當惑とは何事で御座るか」

良雪の一言は千斤の大鐵鎚である、生死透脱大死一番底の消息である。大石暫時黙然たりしが、豁然として曰く、

「誠に能く了解しました」

絶世超倫の士は逸群の作略がある、況して盤珪和尚の禪に參ずると多年、今良雪の大鐵鎚を受け、再活現成の根基が開けた。爾後の大石が一機一境の活三昧は今茲に述

ぶるの必要はあるやう。

### 負けず嫌ひの大石正己

往古は小野道風六十にして書を稽古し初めたと云ふ話はあるが、之を事實に行ひ得るは今の世には少ない、我國政治家中人に知られて居る大石正己氏は天性の悪筆で有名な人である。然るに近來夢中になつての書道三昧とは、そも如何なる原因かと聞くに、大石入道の坐禪は其異名と共に津々浦々迄も響いて居るので、一つ記念の爲に揮毫を頼むと云ふ風に、何時も地方遊説の矢先で大書箋紙を廣げて待つて居られる、其都度書があまりに下手なので、如何に悟つて見てもこれでは餘りにひど過ると自覺しては、根が負けず嫌ひの氣性とて、一つ天下の書家を憧着せしめんとこの發憤心より、俄かに六十の手習を初めたのであるとの事。

然らば氏が參禪の動機や如何、これ誰でも知らんと欲する問題である。そは曾つて

國民黨時代、其中堅となつて大ひに辣腕を揮つたのであるが、而も同黨には大養木堂の在つて、常に紛々たる問題を一刀に截斷して、恰も老猿の古臺に嘯くが如き様子に大石たるもの其儘引込んで居る譯にはゆかぬ、何ぞ大養屈服の活作略をと考へて居た。聞説く禪は恰も珠の盤に轉ずるが如く、盤の珠を轉ずるにも似て縱横無礙、八方來には八方打、宇宙來には宇宙打、圓轉自在、應用無盡の妙味があると、思ひ立つたは吉日として早速鎌倉に宗演和尚の門を叩いた、夫より大休、大徹、南天棒、眞淨、禾山柏樹と無暗に他流試合の格で參禪をしたが、就中禾山老漢の室に入らんとせし時の如きは、例の惡辣無類なる老漢の事とて、大石の姿を見るや眞向より三十棒「貴公の如く矢鱈に諸方を懸け廻つて指導者を定めぬ様なもの是我禪門の寄生虫ぢや、衲の所には寄生を許さぬ」と大喝を下されたので、流石天下の大石も之には見事一本參いた。爾來禾山老漢の在京中は決して他には行かなかつたが、老漢一度東京を去ると共に又々浮氣の虫が頭を擡げ出した。

負けず嫌ひの大石正己



其原因は矢張斯道にとりては古參の河野盤州が黨内に控へて居る、何とかして此古參者か追ひ抜かんものと、殆んど突喚的に參禪する次第と分つた。禾山和尚遷化後の今日、東京神田美土土町に大日本禪學道場を築き、南天棒老師を請して其錮鏡を受け、朝は必ず三時には床を蹴つて端坐默想に耽つて居る。

凡聖同居、龍蛇混雜の禪門に、如何なる波瀾を起すかは蓋し今後の見物であらう。

### 一祖慧可の安心

昔震旦の二祖慧可は、臂を少室峯頂に斷ちて達磨大師に參ぜし時、第一に安心の道を求められた、慧可は世間出世間の學理を究め、最も卓拔なる見地を有して居られた方であるが、安心の一事に至つて、靴を隔て、痒を搔く心地があつたものと見へる、達磨大師は單刀直入に「心を將ち來れ汝が爲めに安心せしめん」と仰せられた、心の落許がつき兼て、安心を求めらるゝか、その心なるものは如何なるものか將ち來たり

て見よ、汝が爲めに安心の道を與へんとの御挨拶である。

「心とは如何なるものをいふならん墨繪にかきし松風の聲」と此心の在家は頗る六かしい問題である、惜しい欲しい憎い愛いと動き廻るは、心の影法師であつて心の木體では無い、智情意とか六識八識とかいふも心の作用を見ての説明に過ぎぬ、肉體を離れて別に存在するものなりや否や、肉體の中に在るものなりや否や、腦に在りやせん、胸腹中にありとやせん、そんな處を探し廻つて居る様では、本分底を隔つること十萬八千里である。慕直に嬉しいとか悲しいとか思ふ底のものは何物ぞと工夫して見るが宜い、之れぞ肝心な着眼點である、慧可は此一間に於て大疑團を生じ仔細に研究すると數年の後、漸く御答が出来た、其答は「心を求むるに終に不可得」心の本體を究め盡して、遂に心なきことを知り心の究むべからざるを知る、本來無一物である。是れは決して心の存在を否定したのでは無い。又心の存在を是認したのでも無い。乃ち自己が自己を忘れたのである。是に於て達磨大師は、「汝が爲めに安心せしめ了る」

徹底不可得なることを知らば、其時こそ眞箇の大安心が決定し得らるゝ、大安心の決定が出来得ると同時に、大慈大悲の大神通が自然に發現する。こゝを「聖人に己れ無し己れならざる處なし」とも「大死一番して大活現成す」とも云ふのである。

此境界に達してこそ、人生の意味も明了になり、生死岸頭に臨んでも、萬劫不滅の大光明を放つとが、出来るのである。

### 五臺山下の婆子

支那に名高き五臺山に上る途中の追分に、一軒の家があつて、其處に一人の婆子が居た、此婆子、元來劍刃上を走るの禪者である。追分のことなれば、五臺山参りの者が皆一様に道を尋ねる、若し僧ありて「臺山の路何れの處に向つてか去る」と問ふと、婆子は直に「慕直去」と答へる、慕直去とは慕直に去けといふこと、此言中には大に響がある。

五臺山は文殊菩薩の靈地である、文殊は智慧の權化、三世の諸佛は智慧に依て無明の煩惱を斷じ最勝の正覺を成す故に經には文殊菩薩を佛母、即ち佛を産み出す母なりと云ふてある。其佛母なる大智慧は本來人々に具有して、他より受くべきものでない、此大智慧光明が知識とも爲り道徳とも爲り神とも爲り佛とも爲る、智情意の三大作用も法身般若解脱の三大妙徳も、只一箇大智慧の變化たるに過ぎぬ。

此大智慧を獲得するには、慕直去でなければならぬ、寸毫も譏詔の心、邪曲の念あることを許さぬ、然るに多くの僧は此消息を解し得ぬから、唯だ客觀的に文殊を禮せんと欲して、主觀的に智慧を開發することに心づかず、ソロ／＼と足を踏出して行き懸ける、すると婆子は「好箇の阿師亦た恁麼にし去れり」ア立派な坊さんであるが又かく歩き出した哩、自己の脚跟下を照顧せず漫りに外に向つて智慧を求めんとす、故に求むればいよく智慧に背き進めば益々文殊に遠ざかる、眞に能く文殊に相見せんと思はゞ、唯だ慕直去なるべしと、今日の參禪者にして能く婆子の婆心を領得する

ものそも幾干ぞ。

### 小兒の如かりし伊達政宗

仙臺北山の曹洞宗輪王寺第十世鱗庵和尚は伊達黃門政宗公の請に應じて同寺へ任ぜられた。或時政宗遽然として丈室に飛込み、三尺の秋水拔手も見せず和尚の頭上目懸けて真向に打下した。恰も閃電光の如き活作略、峻峻の大喝一聲「正當懲廢の時、劔刃上の一句作麼生」とやつた。和尚悠揚迫らず、慈眼微笑を湛へ、直ちに擒住して曰く「更に道へ々々」と、滄溟の浮木に接せしが如き態度に、政宗曰く「險」と、和尚曰く「將に想へり箇の俗漢！」動著すること莫れ、動著せば三十棒と言はん計り、眼中乾坤を吞却して、佛を呵し祖を罵る底の手脚に、政宗實に鱗庵の道力を試みんとして、却つて此惡辣の手段に遇ふたのである。相馬城下に少數の兵を引率して宿泊せし大膽無比の英雄も、鱗庵の接待に對しては小兒の如く、爾來政宗は和尚の膝下に參じて漆桶を打破し、眞實徹底の境に至つたのである。

### 超然たる風格の柏樹翁

白髮清軀童顏長髯、師の容貌は如何にも神々しい、一度師に接する者は、其偉大なる人格に頭の自ら下るを禁じ得ないであらう。而も一點の懸隔を挟まず、初對面にも舊知の如くニコ／＼せる相格は、實に宗教家として遺憾なしと云ふべきである。師は天保七年四月七日を以て豊前小倉に生れた。父は藩の擊劍師範役を勤めて居つた青柳彦十郎と云ふ人で、師は其次男であるが父母の反對したに關はらず自ら進んで出家になつたと云ふ、一體同師は凡俗に超然たる所があり、身は禪僧であり乍ら東京官立學校に教鞭を執り終に院長に推された事すらある。又基督教聖公會の立教神學校に二十餘年間教員の職を執つた。今や黄檗宗本山管長の榮位を荷ひ、時々上京せられることがある。春風駘蕩として墨堤の櫻花漸く蕾を破るの時、三圍社邊興福寺の禪堂

超然たる風格の柏樹翁

に師の提唱會が催された、其の時參禪者に與へられた一句が面白う。

「ボート競ひにきそひさく、ボートもボート、花も花、第一義諦作麼如何、かすみわたれる墨田川！喝」

### 一矢に貫かれて豁然大悟

天正年間のこと、中山家範居士、法名は宗無と云つて、北條氏照に仕へた人であつた。此の人中々の英雄で、又熱心に禪門に歸依した人である。氏照が會て宗關寺を再興し、當時の禪門の大徳、隨翁禪師を請して、その住持といはした時には居士は自ら土木の勞をとり、彼是と隨分に骨折られたと云ふ位、そこで或る日のこと、禪師を訪うて、坐禪の道を尋ねられた。すると、禪師は不思議の話を擧げて示されたそれからと云ふものは、孜孜として斯道を勵み、日々自己の見解を述べて禪師に參得し、四年間と云ふものは、殆んど寢食を忘れて參究せしも禪師は之を許されず、たま

く豊臣公が戦を起して、北條の門族を小田原城に圍みし時、氏照兵を引いて之を援けた。此の時、居士は八王子の城を守つて居つたが、此の戦に出て、獅子奮迅の勢を以て盛に戦つて居つた、其刹那、ビュウツと敵の矢が一本飛んで来て居士の額に當つた。そこで居士は豁然として悟る所あり、やがて敵の圍の中を遁れて、禪師の下に來り、自分の所悟を述べられた處が、禪師初て之を首肯し、手づから金襴の安陀衣一肩を賜はつた、居士禮拜して之を頂き、直に鎧の上にかけて、急いで自分の城に歸り、劍を執つて自ら刺し、血を滴らして一偈を書き、從容笑つて死に就かれたと云ふことである。實に壯烈の極みではないか、其偈は

提起吹毛劍。凡聖齊潛蹤。清風拂明月。明月拂清風。

と云ふので實に此の一大事の爲めには痛快なる動作であつて、遺偈に至つては威風凜々たる者である。

### 盤珪和尚の疝癩治癒法

盤珪和尚は禪門近代に於ける高僧で、丹波の人である、一日或る僧が「私は物事に付て腹が立つて非常に疝癩を起して大に失敗する、どうか之を除いて頂戴したることならば師匠も喜び、又老人や兄弟も喜ぶ、私は勿論幸福な事であるから此忌やな奴を除いて頂きたい」と申し出た。すると、盤珪和尚「お前腹が立つか」左様です、生來腹が立つて困ります」「生來腹が立つて困る、」それでは何にか親に腹の立つ性質を産附けられたといふ考へだな」どうも左様であります、両親がこんな怒ッぽい奴を産て呉れたのは誠に残念であります」然らば其の腹の立つ奴を此處へ出して見る」イヤ今はありません少しくも腹の立つ様なことはありません」何だお前は産付けられたと言つたてはないか、早く此處へ出せ」イヤ今は有りませぬ、何んだか嬉しうて溜りませぬ」それでは丸切り先刻と反對ではないか」左様です、誠に有難くて怒れさうな事は

ありませぬ」さうだらう決して持つて産れたので無い、物に對し自分の思ふが儘にやりたいといふ考を持つても人が相手にならぬ、自分の思ふ様にしたいから腹が立つのであつて、我見と云ふ奴、己がと云ふ考を除いて行つたことならば必ず腹を立つ事は無い」と申された。

盤珪禪師は實地坐禪といふものを修行なされたから斯う云ふことが云へるのである。

### 秘密を授けし堅光和尚

寂室堅光和尚は江州永源寺の開山であつて、幼時より智慧衆人に勝れ、中々の才物であつた。或る時座下の衆徒に向ひ「山僧に緊要の一訣がある、けれども之は誠に秘密なもので久しく大切にして居たが、今汝のために之を授けるから、輕々しく人に語つてはいけなぞ」と、衆何事ならんと聞けば「汝毎日朝起きたならば、第一番

秘密を授けし堅光和尚

に先づ手を以て頭を撫て、次には目で自ら身に掛けて居る袈裟を顧み、そうして心靜かに、我れは是れ辱なくも釋迦牟尼佛の法孫であるから、假令、如何なる事があつても、決して釋迦の戒律に背かずと覺悟せよ」と。

此の事を當時の朱子學派の大儒であつた、室鳩巢が聞いて大いに之を賞歎し、是れが又遂に武士の心得にも及んだとの事である。

### 黄金百兩に米百俵の布施

深川區木場の材木問屋に白木屋といふがあつた。此白木屋の手中の珠なる一人娘が大病で、さまざま手を盡して療治をして見たが驗がない、醫者も最早藥の盛り様が無いと匙子を投げて、息を引取るのを待つばかりになつた。此上は神佛の力に頼るより外に致方が無いと云ふので、急飛脚をたて、鎌倉圓覺寺の誠拙禪師を迎へに來た。やれ／＼それは氣の氣なことであると云ふので、直ちに駕に乗つて來られたから、主

人は泣きながら娘の病氣の始終を話して、何卒助かるやうに有り難い御經を讀んで下されと頼む。禪師は「よし／＼何でも讀んで進ぜやう、然し、御布施は少し多分に前金で貰ひたい、老納は後金と云ふのは大嫌ひだ」主人「それは一人娘のことであるから、助かることなら身代半分を御布施に差上げてでも大事は御座りませぬ」といふ。禪師「それでは金百兩と米百俵を申受けたい」主人「これは少し多過ると思へども、身代の半分差上げて宜いと云ふた廉があるから、それは高い、少々まけて下さいとも言はれぬ、承知の由を答へた。禪師「それでは其金と米を急に鎌倉へ人夫を仕立て送つて呉れ」と言ひすて、ずつと佛間に入つて般若心經を口の中でブツ／＼誦して居られたが、頓て娘の寢て居る枕頭に來て「御前も此大家の一人娘と生れて來ながら、其榮華も受けなくて死ぬのかい、氣の毒のことぢやの、定命と言ふものは神でも佛でも逃れ様はない、お前も定命で死ぬのであるから、誰を恨むことも無いのぢや。然しながらお前は仕合せ者であるぞ。只今老納は御布施に金百兩と米百俵を貰うた、これ

は直ちに鎌倉へ送つたが外の事に使うのではない、僧堂に居る若い坊主共に食はすのである。僧堂には五六十人も居るが、この中に五人や六人は慥かに眞の佛に成る者が居る。然ればお前は佛と縁を結んだと言ふものぢや。難有い事ではないか、安心して死ね、御前は實に仕合せ者ぢや」と言ひすて、病室を出て「老衲はこれから増上寺へ遊びに行つて来る」とて、フイと白木屋を出られた。あとて主人は大不平、折角大枚の金と米を費しながら、娘病氣平癒の祈禱もして呉れずして、却て死ね、何事だと、こぼして居たが、それにひきかへて娘の方は誠拙禪師の垂示を得てからと云ふものは、大安心を得たものと見えて、前の如く病苦にも惱まない。その晩も六つかしいと思つた大病人が死なぬ、二日三日と過ぎて、遂に夢の覺めたやうに治つたといふことである。

の 仙崖和尚の貧乏神

博多聖福寺の仙崖和尚は禪畫を能くし、亦狂歌に長じて頗る脱酒の風があつた。ある信者の一人が一別莊を築いて祝筵を張つた、其際和尚を請して屋祈禱の爲めに一幅の揮毫を依頼すると、和尚早速快諾して直ちに筆を執り其家の圖を略寫して、この上に賛して曰く

此家を貧乏神が取巻さて

ト認めて筆を投じた、主人は不吉なりとて和尚に迫ると、和尚破顔一番、その下に筆して曰く

七福神の出所もなし。

六祖慧能禪師

六祖大鑑慧能禪師は、南海新州の樵夫なりしが、市中に於て金剛經を聞き「應無所住而生其心」といふに至りて省あり、遂に黃梅山に上り五祖弘忍大師に參ぜられた。

然れども別途の修行なし唯だ碓房に在りて米を搗くこと八ヶ月、此間に十分の修養を積み、五祖の衣鉢を相續せられた。

慧能禪師と神秀大師とは五祖下の二神足である、能は宗を南方に振ひ秀は法を北地に布く、是に於て南頓北漸の名も生じたのである、能は八十生の善知識と稱す豈に一毫の我見をも存すべけんや、秀の坦懷雅量亦た是れ百世の師表と謂ふべきである、吉州の志誠禪師は初め秀大師に師事し、南北兩派の漸く盛んなるに及び、秀の徒衆は往々に南宗を譏る、時に秀その徒に告げて曰く、「他（慧能）無師の智を得て深く上乘を悟る、吾は如かず、且つ吾が師五祖親しく衣法を付す、豈に徒然ならんや、吾が恨む所は遠く去て親近して虚しく國恩を受くる能はざることを、汝等諸人此に滯ること無く曹谿（慧能の所住所）に往て疑を質し、他日廻り復して還た吾が爲めに説くべし」と、志誠は此語を聞いて遂に禮辭して慧能禪師に參得せられたとある。嗚呼、法に依て人に依らず道を重んじて己れを輕んずるは、道人の高風である、偏狹我執の漢は宜しく秀大師の雅懷に倣ふべきである。

### 無欲の生涯賣茶翁

賣茶翁月海は肥前の人である。何故に此の賣茶翁の名が普く四方に傳つたかと云ふに翁は常に自ら謂らく、「釋氏の世に處するや、命の正邪は心なり迹にあらざ、僧伽の徳をして信施を勞するは我志にあらざとして、花の朝も萬目皎々たる櫻樹の邊、月の夕も清涼なる綠樹の蔭、心の向ふところ自家ならざるは無く、自ら茶道具を荷ふて行き、翁の足の止るところは則ち爐を開く處となつたのである、それ故に遠近の人喜んで來り、遂に其の名を得るに至つた。

茶錢は黄金百貫より半文錢まではくれ次第、

たゞのみも勝手たゞよりはまけ申さず。

達磨さへあして渡る難波江の



流れを汲める老の我身ぞ

とは翁が茶席に侍りし人の知る處である。又或日人に語つて曰く「私は常に貧にして食するに肉を用ゐず、又老いて事を喜ばず、野服にして茶を賣る、是れが私の無上の快樂とする所であつて、而かも之が能く又私に適して居る。」と

翁は晩年に至りて、久しく其愛玩したる茶道具を全部未練なく火に投じて焼却し去つた、其焼却の語に曰く

我從來孤貧、無レ地無レ錐、汝佐ニ輔吾ニ曾有レ年、或伴ニ春山秋水、或鬻ニ松下竹陰、以故飯錢無缺、保ニ得八十餘歲、今已老邁、無レ力ニ干用ニ汝、北斗藏レ身、將レ終ニ天年、却後辱ニ世俗之手、於レ汝恐有ニ遺根、是以賞レ汝以ニ火聚三昧、直向ニ火焰裏ニ轉身去、轉身之一句如何、良久云、却火洞然毫未盡、青山依舊白雲中、便付ニ丙丁。是れ實に寶曆乙亥の九月四日のことである。

以後は門を閉ちて客に少しも接すること無く靜かに晩年を送りしと云ふ、又常に人

に語つて曰く「若し一舉頭普く物機に應ずるに足りしならば、それは人の師となりても差支ないが、さもなくて徒らに學解を以て飾り、然も宗匠然たるに至つては、私の大いに耻辱とする所である」と、歌あり曰く

笛ふかず太鼓たゝかず獅子舞の

あと足になる胸のやすさよ

翁の此奪ふ事の出来ない抱負が如何に世の人に了解されて居ることであらう。

### ○生死の關を透得せし兩雄

明治元年戊辰の春に官軍が東海道を殉へ、軍を進めて江戸を攻めんとするや、西郷隆盛は總督府の參謀として品川に到つた。其の時徳川氏にも勝海舟なる豪傑があつた爲めに、自ら隆盛に會して、將軍徳川慶喜恭順謝罪の狀を陳べ、此に兩英雄の談笑に依つて、無事江戸城を總督府に明渡すこととなりし一事は世人のよく知る處である

が、此の勝海舟が牛島の廣徳寺に在つて參禪に餘念なくして遂に得る處のあつたと云ふ事も多く知られて居る。

曾て京師にあるの日、勤王黨と呼べる、中に太く海舟を惡むものがあつて、彼を殺さんとして、或日四條通りを過ぐる折から、物蔭より待ちまうけたる一人の覆面した武士が現れ出て、銃を構へて正に海舟を討たうとした。處が之を見た海舟は毫も騒げる色なく、徐かに武士の方へ歩を進めて云はるゝには、「それはとても己れの體は打てん、ねらひが丸で外れて居るではないか」と云つたので、件の武士は大いに愕いて、一發も放つ事を得ずして、惶惶として逃げ去つたと云ふことである。

又或時、佐久間貞一、人見寧、梅澤敏の三人が鹿兒島に行つて、西郷翁を刺さうと云ふので、海舟に其紹介狀を頼んだことがある、すると海舟はよしくと早速筆を取つて、「此の三士は幕士にして今般足下を刺んとして態々其の地に行くもの故、幸に接見の榮を垂れ給へ」と書いて與へた。神ならぬ身の三人は書中に如何なる事が書いて

あるかは知らず筈がない、彼等は喜んでそれを持つて、南洲翁の處へ行つて面會を求めた、すると恰も其時は丁度熱い盛りであつたが、玄關に諸肌脱いて横臥して涼んで居る大男が在たから件の書面を渡すと、彼れは直ちに封切つて見て、「ハイ吉之助と云ふのは私であります」と云つて、奥の間へ通して茶菓をすゝめて後、「さて卿等は私を刺すと云ふので來られたか、遠路甚だ御苦勞であつた」と云つたので三人の者は機先を制せられ色を失つて、今更手出しもならず、空しく歸つて、海舟に向ひ西郷は實に非常な人であつて、我等の殺しに行つたのを已に承知して居つたから遂に志を果すことが出来なかつたと云つたとの事である。

### 奇傑乞食桃水の行履

白雲を蓋と爲し、三界を家として去來無相の的意を實地に履踐せられし作家の漢は、古來わが禪門には決して珍らしくない。近代の奇傑桃水和尚の如き亦其一人である、

桃水名は雲關、筑後の人である。肥前島原の禪林寺に住居して居たが、一旦寺を去つて其跡を味まし、形體見る影もなく諸所を流浪して終に乞食桃水の名を得た。

或時の事、桃水京の四條磧で乞食と共に相伍して居た。曾つて一尼僧あり、桃水を崇信するのあまりに、諸國を探り廻つて四條磧に來た時、折よくも桃水の一病軀の乞食を看護して居るのを見た。件の尼僧は悲しみのあまりに聲を發して泣いたのであるが、携へ來りし衣服一枚を送つた、すると桃水は自分で一寸頂いて直ちに病人の乞食に與へて了ふた。此有様を見た一同の乞食連中、益々桃水の徳に崇信するに至つたとの事である。

又或時、桃水は天津に至つて履を鬻ぐ。蓬髮垢面にして衣は破れ、膚が現はれても少しも意に介せず、悠悠として歩いて居ると、其處に桃水の一人の弟子が轎に乗つて多くの供人を連れて通るのに逢つた。弟子は直ちに轎より下りて桃水の手を握り、師の奇遇を喜んだが、桃水は只一言「朱門に酔ふなよ」と言ふそのまゝ、瓢然として

行つて了ふた。此人は熊本侯の香花院に住職して居つたのである。

發狂と誤られし岡田自適

久しく南天棒下に參じて、禪の玄底を探り、刻苦精勵終に心事を了じて、擊石火裏に緇素を別つに至りたる岡田病院長自適居士、岡田乾兒氏は七穿八穴、他人の窺ひ知らざる苦心があつたのだ。氏は性來の魯鈍、殊に年紀十五六よりは極めて病弱の身、學才亦進まず、記憶力判斷力共に乏しく、天稟偏屈の性は遂に臆病と化し、其顔色は蒼白にして元氣充實せず、その學業は年を逐ふて漸次退歩するばかり、乍併、氏は勉勵刻苦、殆んど徹夜を續けての努力も其甲斐なかつたので、夜半人靜まるの時、徐ろに前途を想ふては幾度か死を覺悟した。されど慈愛溢るゝ兩親の眞情に思ひ至れば夫もならず、爾來身心の安逸を食ると二年にして漸く學業を終へた。けれども氏の胸中は穩々地に一物あるが如く、心中脱酒ならず、常に不満を感じて

居た。これ畢竟初一念を貫かざりしを悔いたものであらう。於茲、彼は初めて宗教を  
 究めた、而して芝は青松寺に北野元峰を訪ふて參禪を願つたのである。和尚は案外に  
 喜んで、「それは殊勝な望みぞや、感心ぢや、衲は人に強ゆる事は好まぬが、志があ  
 れば坐禪に如くものはない、惜い哉汝の年齒既に壯年を超えて居るが、然しそれも一  
 心ぢや、何でも勇猛にやれば打ち抜ける哩」と、懇切に坐禪の儀式を垂示されたので、  
 氏は歡喜譬ふるに物なく、以來日々職業を了へてより土藏に飛び込み、線香を立て、  
 只管坐定三昧、夜十二時一時になると筋骨は痛む、妄念妄想は愈々熾烈を極め、頭腦  
 の内部は早鐘を撞くが如く、煩悶益々加はつて來た。其後數十日多少の效果の見るべ  
 きを知つた元峰和尚は「主人公」と大書して「暫く之を汝に貸與す、此幅に向つて香  
 華を供へて莊嚴し、其前に端坐して主人公々々々と、腹一杯に拈提せよ、決して他意  
 を挟むな、汝の主人公が歴然打發する迄は是を汝に貸與せん」と云はれたので、氏は  
 直ちに其幅を土藏内に掛けて、其前に端坐し、夜々「主人公々々々」と大聲呼號する  
 を常とした。

其聲を漏れ聞ける妻子眷屬は、漸く之れを怪しみ、全く發狂したものかと思はれ、  
 一時は爲めに非常な心配をかけたとは氏の自白である。以て如何に求道の熱烈なりし  
 かを知らるゝてはないか。この覺悟と信念がなければ、鐵樹に花の開く時節はないの  
 である。

### 柏州和尚と大久保甲東

柏州和尚は大隅國志布志の大慈寺に住した妙心寺末の宗匠である。彼の西郷南洲が  
 無三和尚の鉗鎚を受けた如く、大久保甲東を陶冶したのは此の柏州和尚である。甲東  
 は這個の關梶子を透過するためには幾度柏州の丈室を叩いたか知れぬのである。  
 明治維新の政變に際し、柏州の京攝の間において竭した功は決して少なくない。此  
 間の消息については大久保甲東が後に始終人に語られた。丁度その頃は士分の者は妄

りに國を出る事が出来ないのて、京都の動靜を知る必要が多いから、柏州和尚を京に上らすとに一決して甲東は南洲と同道して久光公の命を受け、大慈寺に行き、「公が期くくの仰せてあるから大和尚一つ憤發して京へ出張を願ひたい」と懇々と説いた。其言の終らぬ内に和尚は呵々大笑「一體貴様達は何様考へて居るか、此掌ほどの薩摩一藩の事さへ治まらぬ分際て天下を治めやうなどは大膽至極ぢや、一藩の事どころか貴様方は、僅か五尺の一身さへ修めることが出来ぬてはないか夫て天下の事に骨を折る杯とは片腹痛い」と壯語して、無限の輪鏈に撃てども開けざるの有様。尚ほ押返して「實は御内命を受けて來ましたのて」と云ふても「夫は何てあらうとも、馬鹿な事を云ふな」と一向取合はない。大久保甲東満面の慚惶を施してすごとくと鹿兒島に歸つて久光公に斯くくと申上た。

久光公はほゝゑみみて「夫は其方が云ふても駄目ぢや、乃公が直接頼んでみやう」とあつて、直ちに使を發して柏州和尚を急に御呼出になり、左右の人々を退けて最も懇ろな話があつたのて、柏州は「左様な譯ならよろしい、納が慥に引受けた」と、明日と云はず、その夜直ちに飄然と京都を指して發足した。爾來京は花園の妙心寺に錫を留めて公卿や諸藩の志士と往來し、公武の間の實情を探つて薩摩へ密報した。薩摩に於て順聖公の遺志を繼承して勤王の事に盡すについては柏州の功は與つて大いに力があつたと、甲東はいつも心服して人に語つたところである。

### 鐵文和尚の奮勵の動機

三州の鐵文道樹和尚は行脚の時に肥前の伊萬里に到つて休々菴の馱子禪師に參した。或一夜大衆と共に夕飯を喫するの時、長太息をして言ふには「斯く檀越の信施を受くるも之を用ふるだけの徳道がない、眞に悲しいことである」と。時に隣席に風外といふ禪者が居て「汝若し飯を食ふ底のものは何者ぞと識得したなら信施は愁るに足らぬ」と言うた。鐵文は之を肯はずして云ふ「縦令識得するも信施を消することは難

からう。時に風外慕向より一掌を與へた、其時鐵文は覺えず憤然として湯盞を壁に抛げつけて僧堂に歸つた。其後殘念でならぬので風外と言を交へざること六ヶ月の久しきに及んだ。時に默子禪師が叱して言はるゝに「風外は汝の爲めに警策したのである、何故に彼を恨むぞ」と。それでも鐵文は尙ほ服せずして風外を惡み、吾れ若し大事を發明せば必ず風外を打ち殺すと息巻いてゐた。

それより奮勵一番只管に坐禪し、一日櫻樹下の石上に坐して、半夜に疲勞し困睡して打倒れたる刹那豁然として大悟した。直ちに方丈に上りて所解を呈すると、默子禪師も證明せられた。其時初めて風外が警策の眞味を會得し、坐具を展べて懺謝し、「老兄の激發にあらずんば争か今日あるを得んや」と、泣いて過日の罪を謝したとの事である。

### 忍性法師無限の法徳

相州極樂寺の忍性法師、字は良觀といふた。其修行中にも、大衆の衣服を洗濯し、或は僧房の掃除をして陰徳を積まれた。更に常施院を建て、幾多の病僧を治療し、悲田院を設けて多くの乞食を救ひ、夫を無上の樂みとせられた。或時奈良坂といふ處に一人の癩病患者があつて、手足は皸屈して歩むことも出来ぬ。忍性法師は之を憐れに思召して曉には患者を負ふて市場につれ行き、路傍にて乞食をさせ、暮になると復患者を負ふて歸り、自ら患者の汚れを洗ひ淨めて看護し、如何なる夏の暑さにも、冬の寒さにも厭ふことなく親切に看護せられたので、其癩病人が臨終の際に「我れ誓つて必ず再び此世に生れ來り此大恩に報ひ奉らん」と云ふて瞑目した。之を見聞する人人大徳の篤實に感ぜぬものはなかつた。また寛元元年には先に物故せられた母親の恩に酬いる爲めにとて、十八個所に施行場を立て一萬八千人の乞食に食物を施した。それより弘長元年に至て關東教化の爲に鎌倉に入り、北條時頼は光泉寺を建て、師を請して住持せしめ、北條長時は極樂寺を營んで開山とした。師は得る所の施物は悉

く、或は圜圜の人に散じ、或は寒素なる人に與へ、或は衣服を脱して人に施し、錢物を頒ち、盲者に杖を授け、乞丐に布袋を製して授くる等、棄子を拾うて金錢を出して乳養せしめ、病馬を集めて治療し、佛名を唱へ、小簡に呪を書して其頸に繋ぎ文珠地藏等の菩薩を自ら畫いて男女に頒ち與へ、凶年には糜粥を煮て餓ゑたる人を救ひ、疫病の時には患者を招き集めて、藥劑を投じて撫活せしむること其數を知らず、北條時宗が桑谷の地に療病舎を作て施療したが、時宗が薨去してからは、師が勸財して之を經營し、毎月患者を看護すること前後二十年間にして五萬七千二百五十人を養ふた。そこで世人は師を醫王如來と稱して尊敬した。師は是の如く慈心深き大徳である。されば日蓮上人の如きは師の奉ずる律宗を律國賊と罵つてゐたが、師は少しも意に介せずして、日蓮が罪に陥るに及んで却て之が爲めに宥恕を乞ふたのである。師は嘉元元年七月十二日に八十七歳て入寂せられたが、得度の弟子は二千七百四十餘人、白衣の弟子は其算を知らず、本院を結界すること七十九所、伽藍を修營すること八十三所、佛

塔を建立する二十區、大藏經を納むること二十四藏、諸國に橋を架すること百八十九、百八十町の水田を開き、道路を修繕すること七十一ヶ所、義井を鑿ること三十三、殺生を禁ずること六十三所、乞丐に施す所の布衣三萬三千領に及んだ。

### 江川坦庵歸佛の真相

江川坦庵は天性至孝の人で、一日母が椽側に出て手の爪を剪つてゐた、其時庭前に遊んでゐた坦庵は忽ち來つて椽先に落ち散つた爪の細片を拾ひ集めるので、母は不審に思ふて「何に致さるゝか」と尋ねると「母君の爪を踏み候事もあらば恐れ多し」と答へた。又坦庵が十三四歳の頃、一日乘馬の稽古を餘念無くしてゐたが、如何にしたりけん、過つて落馬し右の腕の骨を挫いた。素より孝心深き彼は、母を驚かすことを慮れたが、其痛みに堪へ兼ねて母の前に至り「只今乘馬の稽古中過ちて腕を傷け候へば何卒塗藥を賜はれ」といふに、母はさまで驚きたる様子もなく、靜かに傷を驗して、

手づから薬を塗り終つて「男兒が一旦武術の修行に思ひ立ちし上は、斯かる事は間々あるものと覺悟せられよ、古人も三度臂を折りて後に良醫となると云はずや」とて戒められたといふ。

坦菴の母は天保元年八月四日に逝去したが、其病革るや、坦菴を枕頭に呼んで、平常肌身離さず頸に掛けたる念珠をとつて之に授け、「今我死に臨みて、汝の文武の業につきては、聊か心に掛ること無けれども、唯だ一言申し遣したきことあれば善く心を留めて聞かれよ、凡そ人の事を成すは物に堪へ忍ぶにあり。願くは我亡き後も、公務は更なり何事につけても天才を恃むことなく、事の大小輕重に論なく、飽くまで勘忍の二字を守りて事に當られよ。斯く言へばとて汝が日頃、天稟の才能を恃むなと云ふにはあらず、兎角少壯の人は才も不才も堪忍か大切なりと申すなり。行く末長き歲月も、我身の事を思ひ出なば、此念珠を母とも思ひて、今宵の言を思ひ起し、ゆめく才氣に任ずる行ひを爲し給ふな」と、戒めて瞑目せられたといふ。此遺訓は坦菴の惱

裏に深く印象せられて生涯彼が身を守つたのである。又此時母より授かりたる念珠は終身肌身離さず所持して自ら逝去の時、遺言して其柩中に入れて葬らしめたといふ。

坦菴の兄は英虎と云ひとて文政四年に歿した、其時、坦菴は哀痛に耐へずして、聲を呑み、涙を包んで、窃かに佛經を書寫し、又佛像を鑄造して、其瞑福を祈つた。且つ自身の病没する時も侍僕に法華經を讀ましめて之を聞きつゝ、瞑目したといふ。是の如き信念ある人物であつたればこそ大業も成したのである。因みに坦菴が佛敎に關する詩を二つ三つ記すことゝしやう。

無上菩提在何處、 筆頭那盡箇眞風、  
諸看教外別傳趣、 便是參乎一唯中。

默坐焚香塵念空、 心情清處與神通、  
鳶魚飛躍君嘗見、 秋水長天一色中。

江川坦菴佛の眞相



八萬法門元是空、 課經終日意何通、  
旁人若問玄々妙、 微笑點頭默々中。

舌一枚の風外和尚

香積寺の風外と云へば、誰れ知らぬものもないが、殊に其の門下より多くの機智才能ある傑物を出したのでも中々有名である。即ち彼の奕堂、坦山、白鳥の鼎三等は皆其門下より出たる怪物である。

此の和尚は常人より異りたる處が頗る多いので流石の奕堂や、坦山でも吃驚したと云ふ物語が澤山にある。これも其一つであるが、和尚は天性至つて枯淡酒磊にして、心を細事に惑はずと云ふやうなことは少しもなかつた。嘗て奕堂が其の座下にあつて、辨道して居つた時に、餘り大勢の雲水を養ふて居つた爲に、一時米麥に窮乏して如何

ともすることが出来ず、甚だ困難な境遇に遭ふたことがあつた。けれども和尚はそんなことには頗る平氣なものであつて、何處を風が吹くかと云ふ有様であつた。來るものは少しも拒む事なく毎日「ドシ」と參來する雲水等を掛錫させると云ふ始末、之れははととも庫院の方で遣りきれぬと云ふので、典座や副司は窃かに集つて相談した結果、一日奕堂が方丈に行つて、目下米麥缺乏の爲め困難一方ならぬ有様を逐一申し述べて、而して後「何卒一時四方より參來する雲兄水弟を斷つては加何てありませるか」と云ふと、和尚はつくづく「奕堂の顔を見つめて居たから、その事についてはかやう致せとか、彼の方法を講ぜよとか、と云ふことと思つて居た處が、和尚は何んとも云はずに、突然アツと大きな口を開いて、ペロリと舌を出して、「どうぢや老衲の舌はあるかないか」と尋ねられた。奕堂はあんな長い舌をペロリと出して居ながら、なんだあるか無いかとは、随分可笑なことを問うたものだと思つたが、仕方がないから「ハイ舌は満足にちやんとして有ります」と、答へると、和尚は「あゝ左様か、舌

さへあればそれで結構だ、若し無ければ大變だ、之れさへあれば何にも別段喰ふには困らない」と事もなげに言つたので、流石の奕堂も只啞然たるのみ。

### ○天狗に授戒して坦山和尚

禪宗の高僧原坦山師は帝大初期時代に於ける佛教哲學の講師であつた。其後辭職して函根湯本の某寺の住職に坐られた。其寺には妙な事に天狗を祭つてあつて新任の住職は必ず一定の式を行ふことになつて居る。或る日檀家を集めて坦山和尚天狗開扉の式をする事となつた。檀家の面々は謹んで住職新任の儀式に列なると坦山和尚は纏て其本尊天狗の木像を壇より下して、自分が其天狗の木像を取つたあとの壇上に登り説教を初めた、此有様を見た一同は眼を丸くして「和尚様それはお罰が中りましやう」と云ふと、和尚は平氣で云ふには「天狗と云ふものは佛法の方から見ると位が下で、人は天狗より位が高い。況んや生きて居る人間は尚ほ位が上である。今愚僧が天狗に

授戒したからもうそれで可い、本日の儀式も是れて済んだ」と云ふて壇を下りた。虎穴に入らずんば虎兇も擒ふる事が出来ぬ、和尚の活作略は實に當所々々に現成して居るのである。

### ○物外和尚と近藤勇

安藝國濟法寺の物外和尚は明治維新の頃に有名であつた禪僧の一人である、和尚は非常なる腕力家、特に柔道の達人であつて、如何なる堅い板でも和尚の拳骨で打てば必ず凹むだ。

或年江戸へ出た時、淺草の古道具屋で一の碁盤を見て大層氣に入つて買ふ約束をする、道具屋が手付を呉れと要求した、和尚其をり一文も持合せが無かつたので、其碁盤を取上げて裏面を拳骨で押すと、ポツクリと穴ができた。「これが手付である」というて笑はれたさうである。斯様に腕力家であるから、世人は安藝の物外と言はずに

拳骨和尚と綽名してゐた。

物外は柔道ばかりでなく、劍術にも熟達し、大坪流の馬術を學び寶藏院流の槍術をつかつて、力量と武藝とを兼ねた禪僧であつた。武藝者は多く没風流なものであるが、物外は中々の雅人で、俳句を善くし、勤王の志も深く

雲の上も君の御國や富士の山

などの吟あり、又和宮様の徳川へ御降嫁の時には皇室の衰へを歎いて、

桐一葉落ちて天下の秋を知る

と吟じた程である。

物外の濟法寺は三原町に近い所であるが、三原の太守が物外に歸依してをり、御招きになつたが、或時三原侯が畫工に命じて雁を描かせた所が、孤雁の畫を造つて奉つた、太守は之を觀て大いに御氣嫌を損じ、「雁は群り飛ぶべきものであるのに、孤雁とは不吉千萬、これ天下の將に亂れんとする兆であらう」

と言はれて、不興に御召された。近臣のものも君公を慰め兼ねて、困りきつてゐた所へ、適々物外が參殿した。和尚は例によつて太守の御氣嫌を伺うと御不興の體で、其理由はこれ／＼しか／＼と承り、然らば拙僧が其不吉なる畫を祝うて目出度致して參らせませうと、早速筆を染めて、孤雁の圖に題して、

はつ雁やまたあとからもあとからも

と記した。孤雁ではあるが、これは初雁で、あとからも／＼飛んてくると如何にも面白くとりなしたものである。此俳句を何人か七言絶句にしたのがある。

一雁呼友作兩雁 三雁四雁五六雁

雁去雁來無限雁 雁々々々々々々

そこで君公の御氣嫌も直つて大層満足なされたと云ふことである。物外和尚が或時京都市中を觀光のをり、頃しも諸國より浪士が洛中へ入込んで、勤王佐幕の二黨が相凌ぎ相争うて居た。其時佐幕黨の近藤勇が新選組の隊長として多くの浪士を率ゐて勢を

振ひつゝあつた。物外和尚は何心なく市中を遊観してゐると、或道場に劍術の試合の音が遠しく聞える、元より好める道であるから、止せば好いのに窓より其試合を見物した。此時試合をして居たのは例の近藤勇の率ゐつゝある浪士で、大きな坊主が笑ひながら面白げに見物して居るのを見て、興ある事に思ひ「坊さん、中に入つて見なさい」とて物外を誘ひ入れ、「一本立合うては如何だ」といふと、物外は「出家の事であるから平に御免を蒙る」とて固く辭退する。浪士は物外の非常な劍客なることを知らぬ、強いて立合せて弄み物にしやうと思ひ「今のやうな亂れた時世に出家だからとて劍術の一手二手位は知らなくては物の役にも立たぬ、拙者等が教へ遣すから、立合なさい」といふ。止むを得ずして鐵如意をとつて浪士の向へまはり、イザと互に身構に及んだが、物外の技倆は此等木葉浪士の到底及ぶ所でない。瞬く間に二三人の浪士は物外の鐵如意の下に降伏して退いた。この様子を最前より注意して見てゐた近藤勇は大いに怒つて、さては我黨の反對の奴めが、出家の風に装うて道場を荒しに來た

に相違ないと思ひ、目に物見せて呉れんずと、眞槍の鞘拂ひに及んで、ツカ〜と進んで來て、「御出家斯様な輕輩と立合は無用なり、拙者御對手仕る」と云ふ、物外は大いに驚いて「そは御無禮と申すもの、拙者が好んで此試合を始めしには非ず、さるを出家の身として眞劍の立合ひ、近頃以て迷惑至極なり、何卒、御免候へ」と辭退した。近藤は「イヤ〜貴僧の腕前、尋常一様のものにあらず、如何に辭退せらるゝとも當道場へ入りたる以上は其儘には還すまじ、強ひて立合はぬとあれば、此槍の錆と爲られよ」と飽く迄も逼るに、物外も今は致方なしと「然らば立合申すべし、さりながら尊公は武夫の事故、其槍にて參らるべし、拙僧は出家の事故、出家の道具を以て御對手致すが如何」といふ。近藤「何なりとも用捨に及ばんや、參られよ」。さらばと物外は雲水僧の常用する袋の中より應量器と名づくる食器を取出し、其中に入れたる小さな黒椀を二つ出して、之を兩手に握り、天地に構へて近藤が前へ仁王立にツ、立ち上つた。近藤は之を見て、おのれ坊主、飯椀を以て人を抑へつけんとするか、新選組の

隊長を飯粒同様に心得たるか、憎く坊主が振舞よなと心中に怒りを發し、眞槍をリ  
 ヌウ／＼として置いて、ピツタリとつける。併し物外の身構へに寸毫の隙もないので、  
 互ひに睨み合せて、氣合の聲をかけるのみであつたが、物外の武器は黒腕であるから、  
 近藤も恐るゝ所なく、一聲高く叫んで衝き出した。物外は體を開いて、電光の如く出  
 したる槍の刃を二つの黒腕でバツト抑へた。ヤアしまつたと、近藤は槍を手許へ繰込  
 まうとしたが、大力の物外が術を以て抑へた槍であるから、衝かうとしても、引かう  
 としても、大盤石の如く動きさうにもない、近藤は頭より湯氣をたてゝ争ふた、物外  
 はエーと一聲叫んで二つの腕を開くと、近藤は二三間後の方へダヂ／＼と跟いて、尻  
 餅をついた。是に於て近藤も大いに驚いて其過ちを謝して、貴僧は如何なる御方で御  
 座るかと尋ねると、拙僧は安藝の物外と申すものであるとのこと、それでは貴僧が  
 拳骨和尙であつたか、甚だ失禮を致したと互ひに打解けて笑うて納まつたと云ふこと  
 である。

中編 舊窠窟

### 高津柏樹の相撲禪

現黄檗山の管長高津柏樹は白髮童顔の風丰、洒落脱洒の禪機、當代稀に見るの老知識である。曾つて壯年の折、槩山に職を奉じて居た、或時御山の使僧として伊豫國波止濱の圓藏寺に派遣されたのであるが、船の都合で暫く滞在せねばならぬことになつた。折しも丁度今治と云ふ處に陣幕關一行の大相撲が興行されて居た、陣幕と云へば、島津公のお抱へて關西きつての大關である。一日柏樹老漢圓藏寺此山和尚に誘はるゝまゝ相撲見物に出掛けた。

只これ丈であれば相撲禪にはならないが、其後相撲は打上げとなつて如何なる都合か、一行悉く波止濱に引移り冬越しをすることとなり、而も圓藏寺が相撲宿となつて陣幕關も其他の力士も皆揃つて毎日稽古相撲をやつて居る。然るに其一行中の前頭到大浪と云ふがあつて其體格、力量共に大關を凌ぐ位であるが不思議にも前頭以上に

はなれなかつた。或時酒宴中に大浪最負の者の云ふには「大浪は御覽の通り體格も偉大であり、力も中々大したものであり乍ら、惜しい事には臆病と云ふか謙讓と云ふか自分の目上の者即ち師匠や兄弟子に對しては何うしても勝てぬ、て本來なれば小結は無論、關にもなれる力量でありながら、今にあの通り愚圖くして居るは誠に残念なものでござる」と慨嘆するのを聞いて居た圓藏寺此山和尚、之も何とかして大浪を出世せしめたいと考へ、「ナンと御使僧様には禪の妙用によつて勝せる工面は御座らぬか」と柏樹の力を借りに來た。

柏樹幼より蒲柳の質、相撲の必勝を談ずるにはあまりに面白さコントラストである。されど彼が透關底の眼、轉身の活路は無礙自由、直ちに「予れ一番大浪に必勝の法を傳授せん」と、やがて大浪を呼寄せて何事かを教へた。然るに翌日の相撲は果して連戦連勝の好果を收め、并み居る一行をして呆然たらしめたと云ふ。翌晩彼が自白して云ふには、「お使僧様の云ふには、何でも眞の大浪にならねば駄目ぢや、盡天盡地都盧

一枚の大浪となれば相撲は必ず勝つに決つて居る、さうするには本堂の柱に靠れて端坐し、背梁骨をチャンと立て、自分は大浪ぢや、苟も眞の大浪ならば島でも山でも洗ひ流す勢である、否自分のみてない、最初は本堂の柱から磬子も木魚も燈籠も佛像も何も彼も皆大浪になつて了ふ、終に世界の森羅万象悉く大浪となつて了ふと觀念して、自分が大浪だと云ふ事も忘れて了ふ様に物我一體の三昧に入れと仰しやるから、一生懸命に觀念して居た、すると夜もしらくと明け、外では大浪々々と呼んだと思ふと打ち出しの太鼓が鳴る、不思議にも夢の覺めた如く心身爽快を感じて大勝利を得た」と語つた、心境一如、物我一體の端的を相撲道に利用せられた柏樹老漢の禪は流石關市裡七縱八横の活作略と謂はぬばならぬ。

### 非凡なる達磨の幼時

達磨は南天竺の香至國に生れた。其國は今から想像すると、ベンガル灣に瀉いて居

る恒河ガンガと云ふ河を經として、三角形を成して居る一地方の中らしく想へる。兎に角南印度香至國の皇子として生れて來た。

さて生れて七歳、珠を辨じると云ふことが傳記中にある、即ち彼の師匠たる般若多羅尊者が、香至王の請に依つて時々宮中に赴かれた、或時王は王室の寶物であつた寶玉を尊者に施された、其時分に王室に三人の王子があつた、月淨多羅、功德多羅、菩提多羅と云ふ三人である、時に尊者が其玉を以て三人を試みた、何と結構な珠玉、欲しくはないかと問はれたら、月淨と功德の二王子は世にも珍らしい立派な物だと答へられた、成程纜か七つ位になる子供ならばさう云ふのが當然である、併し菩提多羅は大人以上のことを言ふ、餘程變だ、變だけれどもさう云ふ所て菩提多羅の非凡の人なることを測り知ることが出来る。此の菩提多羅即ち、後に達磨大師が云はれるには、是は寶は實だけれども實は世間の寶である、一般寶の中に於ては心の寶を以て上とすると、赤ン坊にすると随分言ひ過ぎて居る。光ることは光る。けれども、諸々の光の中

中に於ては智慧の光を以て上とする、明かなるもの、中では心明を以て上となすと云はれた。梅檀は二葉より芳して、是等を神童と云ふのであらう。それより般若多羅尊者に就かれたので二十歳前後である。

### 早川千吉郎の算盤禪

隻手の聲が算盤珠に現はれて、一文錢を三萬兩に使ふ方法が判つたよと、今では白隠其方のけの怪氣焰を擧げて御座るのは實業界の親玉、早川千吉郎氏である。この輕業の如き修行は何處でなされたのか、氏は曾つて語られた事がある。

「明治十六年の事、大學にインキ壺提げて通うて居た學生時代だつた、その年の夏期休暇に郷里なる加賀の金澤、其處には兩親が待つて居る、親戚も久々顔が見たいと云ふて呉れる、佛人千代女の墓、さては雲表に聳ゆる白山の雄姿、此外まだく私を慰めて呉れる物は郷里には澤山あつたが、如何なるはづみか、其歸るさに相州は鎌倉



の圓覺寺に足が向いて、棒雨喝雷、三界を粉碎せんとする荒くれ坊主の仲間入をした。たゞ是丈ならば何でもないが、其頃圓覺寺の管長は有名なる洪川老漢、禪堂には宗海、宗運、宗演、滴水、峨山の諸豪傑が揃つて居て、參禪の僧俗は門前市なす有様。先づ玄關迄參つて見て驚いたのは、數名の雲水が土の上に坐つて頻りに掛錫を頼んで居る。自分は老師に謁見を申込んで、イヤ座敷へ上らうとすると、突然私の後方から「たのんもをー」と人を屹驚させる、何事かと振り返つて見ると、例の土下坐の雲水連ぢや、何だ驚かせるなと糞忌々しく思ふて居る矢先、受附の坊さんが警策と云ふ椹の棒を振り翳して現はれ、如何なる理由か知らんが「當山滿衆、歸れッ」と怒鳴りながら雲水坊士を打擲る、實に慘い事をやる。

一體禪坊士と云ふものは人を何とも思ふて居らんのか知らん、と内心大いに恐れを抱き早やぶる／＼者だが、さりとて今更元來た道に歸られもせず、案内さるゝまゝ、洪川老師に參見した。夫より毎日粥や雜炊を食べ乍ら、朝は三時に起されて坐り込んだ

が、魚肉が食ひたくなつて堪へ切れぬ、ある日狐鼠と門前に出て鶏卵數個を買ふて来て、居士寮へ持ち歸つて食べたが、間もなく惡事露見に及んで、老師の室に引出され、サン／＼油を取られた後に、アノ大きな鐵如意で肩の邊をばウンと打たれる、私には之れ限りの往生かと觀念して坐り込んだが、學校の都合で間なく上京の途に就いた、其途中も幾度倒れたか知れぬ」と呵々大笑。

### 法眼和尚青樓上の三歸戒

法眼和尚は圓通和尚と共に獨湛禪師の門より出て、各々赤幡の下清風を起した一代の偉傑である。その洒脱の面目は同死同生底の道交と共に一如たるものであつた。嘗つて二人京都に在りし時、一日法眼和尚圓通に向ひ言はるゝには「祇園に茶屋と云ふ面白い所があると聞及んで居るが、師兄が従前參つた事があるか」との間に「イヤ未だ一回も參らぬ」と圓通和尚「されば本日これより二人連れ立つて行かうてはないか」

と、相談直ちに一決し麻衣に天臺笠、祇園さして道を急いだ。  
 来て見れば成程聞しに勝る大厦高樓、「此家は一番立派に出来て居る」と、二人は飄然と廊中第一の青樓、玄關先に「頼まう」と叫んだ。何事ならんと出て来りし妓夫の一人「お客様お上りなはれ」と云ふがまゝ、「然らば御免」と二階へ昇り、主人に面會を求めた。何事ならんと二階へ来た主人を捉へて「衲は攝津の法眼、納に紀州の圓通ぢや」と名乗つた。主人は二人の餘りに仰々敷態度に變な和尚共哉と思つて居たが、今其名を聞いて初めて天下に響いて居る禪門の老知識と分りて、丁重に待遇した。法眼登樓するより此家の太夫に眼を付け、何れも窈窕たる美婦、「主人は多くの娘を持たれて仕合ぢや、此座に一同を招かれよ」との注文、主人怪しみ乍ら、太夫を集めて和尚の面前に坐らせた、法眼つく／＼と見て「さても／＼善く育てられた、親の身になつては定めし嬉しいとであらう、後日の因縁ともなるであらうから、種々御馳走の御禮に、是より一同に三歸戒を授ける程に、何れも合掌して衲の言ふ如く唱へられ

よ」と聽て一聲高く

南無歸依佛、南無歸依法、南無歸依僧

と授け了りて「最早娘衆には用はない、衲等も歸らう」と圓通と共に飄然と歸路に就いた。後日和尚は人に語つて「あの様な美しい娘衆が多く居て、宅も立派にしてあるので、若い人達が遊びに行きたがるも無理がない」と大いに感嘆せられたとのことである。或時亦和尚は一人の侍者を連れて劇場の前を過ぎたことがある。然るに侍者和尚は大の芝居好、一寸たりとも覗き見たさに。和尚に向ひ「此大伽藍の中には誠に有難き御佛が鎮座されて居ります、一回拜み玉ふては如何てせう」と云ふと、法眼姑らく考へて「今日は少し急がねばならぬ用がある、何れ重ねて參ることにしやう、けれども折角の事なればせめて結縁の印丈もして行かう」と、木戸口に立つて三拜し、多くの看客の入り来るを眺めて「大勢の參詣者ぢやの」と云ひ乍ら、其處を名殘惜氣に辭し去つたと云ふことである。その脱塵超俗の態、まことに床しい話ではないか。

### 去來無相の兀庵和尚

佛祖の縛を解開しては道に東西の差別はないが、今より六百四十餘年の昔、一葉舟に身を托して遠く異域の境に法門を弘通せしめんとの大信念は素より容易の事ではない、兀庵和尚は宋の末期に於ける禪徳であるが、我龜山天皇の朝、我國に參化せられ鎌倉建長寺第二世の住持となられた。和尚、法諱を普寧と云ひ、徑山の無準禪師の法嗣である。我國の聖一國師等は同參であるから、夙に相知つて居られた。そこで法眷道友の懇請もあつたから大刹の住持を辭して遠く渡航して來られた、和尚時に六十四歳、博多の聖福寺に入つて行李を卸し、尋いて京都に上つて聖一國師に逢ひ、東福寺大衆の禮請によつて陞座せられた。當時我國の禪風は尙ほ微々として振はなかつたのであるが、鎌倉幕府が大ひに宋の僧侶を歓迎したので、和尚は京都より鎌倉に至り、建長寺に入られた。前の執權北條時頼、之を聞ひて大いに喜び、即ち建長寺に入つて

和尚を禮し、會つて夢中に見た高僧の相貌に肖て居たので大いに驚異し讚嘆した。和尚大喝一聲「夢を説く莫れ」と諸天花を捧ぐるに路無きの有様、時頼益々敬服して歸依愈々深く、尋いて建長寺開山蘭溪禪師法席を譲つて和尚を推した、依つて和尚は新に法席に就いて同寺第二世となられたのである。

開堂の日、和尚は徐々と佛殿に入り、暫く本尊地藏菩薩の前に對して雙放雙收、禮拜供養するかと思ひの外「菩薩壇を下りて我を禮拜せよ」と一喝された。千聖不傳底の那一句は先づ大衆の心膽を寒からしめた。これより時頼の歸仰益々厚く、和尚の會下に親參して向上の關捩子を透過した。鎌倉の禪風は大ひに興隆するに至り、遂に文永二年、突然建長退院の上堂をなし大衆を驚かされた。

無心遊此國、有心復宋國、有心無心中、通天路頭活、  
柱杖を擧げて曰く「柱杖頭邊挑日月」と、杳然として歸り去つたのである、これ即ち和尚の全面目。

### ○ 雲居禪師の膽力

常陸の平四郎、後の雲居禪師は伊達政宗の歸依を受けて松島の瑞嚴寺の住職となつた人である。禪師は毎夜十二時過ぎ辨天島の洞穴に行つて坐禪をした、所が物數寄の近隣の若者が一つ老僧をビツクリさせてやらうと色々工夫をした結果、島と陸とを通ずる傍にある一本の松の上に老僧の來る時刻を見計らつて待つて居た。やがて詔の如く老僧がやつて來た。木の下に來ると、若者は突然禪師の圓頂を抑へた、キヤツト驚ろくと思ひの外何とも言はずジツト止まつた、何の風情もない、そこで若者こそ面喰つた體で抑へた手を離した、老僧は何心なく去つてしまつた。若者は明朝早く訪づれて色々の怪物の話などをしたが何等昨夜のことに及ばなかつた、若物は呆れ果て、「それでも昨夜天狗に頭を抑へられたと言ふてはありませんか」と言ふと禪師曰く「あれは村の若者のイタヅラでもあらう、抑へた手が人の手で、然もフツクリして温かつた

よ」ソコで若者は名僧の偉いことを始めて知つて平伏して自己の罪を謝して歸つたとの事である。

### ○ 高張て母の出迎

東京帝國大學法科教授の松波博士は母堂が郷里から出京せられる度に、先生は何時でも大きな高張提燈を持つて出迎へられるのを例として居る。其れは嘗て母堂が新橋で混雑の中で問誤突かない様に高張りを持つて迎ひに出よと云はれたのを守つての事だそうなる。或日々中に提燈持ちをして群集のけんな顔に送られて歸つた書生先生高張りを持つて出迎へは御免を願ひます。ブラットホームの人々が皆變な顔して見ておましたよ」とやると「馬鹿云へ、あの人ごみの中で出迎への者が何處に居るかを探される老人の身になつて見る見榮なんか云ふてをられるか」と相も變らず提燈出迎へを續行されてゐる。

### 小僧の機智と三代將軍

古來より禪僧の機智に長けて居ると云ふことは多く人の知る處であるが、之れは品川の東海寺に有名なる澤庵和尚の話。

和尚は三代將軍家光公の歸依の深かつたと云ふことは今更云ふまでもないが、或日家光公が東海寺へ御出てになり、四方山の話しの序でに和尚に問うて曰く「海に近くして遠(東)海寺とは是れ如何」と、和尚直ちに答へて

「大君でありながら小(將)軍と云ふが如し」と、やつた處が、將軍には大層感じられたと云ふことである。其時に和尚の側に二人の小僧が侍り居りしが、中々惻口さうな顔付きをして居るから、一つ試して見んと、家光公は小僧に向ひ「遙かに見ゆる彼の舟を止めて見よ」と言はるゝと、一人の小僧は直ちに障子を占めた、今一人の小僧は何とするかと思つて見て居ると、其儘自分の眼を閉ぢた。家光公は此の二人の小僧の

機智を感じ、流石は和尚の弟子であると云つて賞讃したが、取りわけ其儘眼を閉ぢたる小僧を深く褒めそやしたと云ふことである。

### 東嶺和尚の俳句禪

俳人雪中庵蓼太、這箇の一事を究明すべく白隱の禪關を叩いた。時に白隱は芭蕉の「古池や」の句を拈得して、「其聲を如何に聞くか」との反問に、流石斯道一流の蓼太も直答に窮した、爾來誠を傾けて參禪すると多年、歸家穩座の時節は終に到らずして白隱の遷化に逢うたのである。

依りて止むなく白隱の神足たる東嶺和尚に謁して教を乞ふた。時に東嶺和尚蓼太の期熟せるを看取して、直ちに一句を認めて示されたのである。句に

飛込だ力て浮む蛙かな

疊上の水練は衲家の禁物、口舌三昧は禪の本分に相距ると頗る遠いのである。蓼太件

の句を一見するや、儼然として笑呵々、厚く師の提撕を謝して辭し去つたとのことである。

### 將に永訣を告げた田中舍身

佛祖の大機は掌握に歸し、人天の命脈も余が指呼の間に在りと、凛々たる全威は滿天下に漲り、等閑の一句一言も群を驚かし衆を動ずる底の活作略ある舍身居士、田中弘之、會つて顔面タンドクの爲に殆んど瀕死の状態に陥り一家親族を枕頭に集めて永訣の辭を遺されたとがある。

明治四十二年の夏の事、氏は顔面の尋常ならざる痛苦に堪へ兼ね、診察の目的で淺草の醫師安齊篤敬君を訪ふた、安齊氏は二十餘年來參禪の客、深く禪旨を究明して既に第一義諦に在るの人である。そこで兩々相對して先づ談論斯道の玄底に及び、互に胸襟を開いて國家の前途の論究してイザ歸らうとすると、篤敬舍身を呼び留めて「時

に君、今日は別に用がないのか」と云はれて始めて、顔面の尋常ならざる旨を述べて診察を請ふた、ハット驚く篤敬「君これは非常なものだ」何が非常なんだ「イヤ君の顔はタンドクと云ふてベストよりも恐ろしい微菌ぢや」と云はれた時は流石の舍身も青くなつたか什麼か、體溫將に三十九度以上。

宅に歸つて見ると小杉博士病没の通知が來て居る、病を押して參つたが歸宅するや殆んど人事不省の有様、熱は四十一度五分に昇り、友人知己一同は見舞に來る。茲て安齊醫師は注射をして暫時の命脈を繋がんと主張したが舍身は聞入れぬ「それではいよく駄目ぢやとの死の宣告を受けた、國からは母も呼び寄せたが、吾輩は敢て今更に死に驚くやうな真似はしない、如何が熱が烈しくなつて宅は今にも崩れさうに見ゆるが、精神は不動着ぢや、依つて一同を枕頭に呼び集めて、これで永訣を告げ様ぢやないか、別に遺言はないが、序だからこの珍らしい顔の有様を醫學の參考上寫眞に撮つて置け、これも故業と云ふて前世の業報ぢや、今それを果したのだから聊かの心残

將に永訣を告げた田中舍身

りはない、この時に出鱈目を並べた。

昨日羅刹面。今日菩薩面。羅刹與菩薩。一條線不距。

とやつたよ」と後日舍身は人に語られた。煩惱即菩提、生死即涅槃の當體を徹底闡明せられたるや否や。身體は大暴雨の如くにして精神の安靜なると恰も春の海の如く、動中靜あり、靜中の動、動靜不二にして生死一枚と達觀したのであらう。死の宣告を與へられた病氣も、見る間に快方に向き、終に今日の田中舍身は生れ出たのである。

### 南洲無三の一喝に怕る

明治維新の前後、勤王志士の大達者を育英された福昌寺の無三和尚、元來は豪邁の質、常に惡辣の手段をもつて人に接したので、誰しも大いに畏れて居た。西郷南洲は和尚の威徳を稱して子爵海江田信義と共に常に相見して心要を叩いて居た。南洲の參じたのは十八九の頃より二十年の長い間であつたが、無三は二人が經世の大器なるを

知り、常に痛棒熱喝、淨裸々赤漚々の手段、萬仞の壁立にも似て容易く近づくことは出来ぬ、兩人或時相語つて曰く「老漢の室に入れば直に痛棒を喫するは必定である、今日は庭前にありて商量し、老漢棒を下さば驀直に走り去らうてはないか」と、行つて椽先に立つて參叩した。無三は兩人の胸中を透見して「這の生意氣奴！」と、恰も百雷の一時に鳴るが如く、金毛の獅子の荒れ狂ふにも似て、實に是れ一場の苦屈、二人の耳は聳せんばかり、南洲が舊時を語る毎に必ずこの事を以てせられたと云ふことである。

### 熱時は閻梨を熱殺せよ

昔時支那に洞山大師と云ふ善知識があつた、年若なる辨道修行中の僧侶が問を發して曰く「寒暑到來如何が廻避せん」と、極寒の最中身體手足も皆な氷となる其寒さ、又極暑の候に炎熱焼くが如き極熱と、同時に到來したる時分は、何處に避くべきことの

熱時は閻梨を熱殺せよ

問である、洞山大師答へて曰く「無寒暑の處に向つて廻避せよ」と極寒と極熱と同時に到來したる時は、寒熱不到の處に避けよとの答である。此僧又た問ふ「如何なるか是れ無寒暑の處」と、去れば其の寒熱の到らない無寒暑の處と云ふは、何處の邊でありませうとの問である、洞山大師又た答へて曰く「熱時は罽梨を熱殺し、寒時は罽梨を寒殺せよ」と、熱する時は、自分も徹底熱に成り切り、寒する時は、徹底自分が寒に成り切つて仕舞へとの答へである。凡てこのナリキルと云ふ事が禪の極致であつて、亦出來難い事である。

### 無食界中の兩老漢

大用現前規則を存せず、或時は牛肉のスキ焼に般若湯を轉じ、或時はフロックコトに金襴衣を將ひて、衆人の心膽を奪つたる原坦山、明治初年の折、京都在の白川村心正寺に住して昌んに怪氣焰を吐露して居た。

其頃、泉州堺の蔭涼寺に住して、雲兄水弟五十餘名を育英し、赤幡の下清風を起して居つたのは、是亦禪門無二の英靈漢久我環溪和尚である。和尚一日白川に坦山を訪ね、四方山の話の序に「如何ぢや、お前は未だ江湖會をやらん様ぢやが、幸納は此夏の助化先が無うて困つて居る、一つ行つたら宜からう、衲が助化をしてやる」と云はれて坦山二つ返事に、夫は近頃忝ない事ぢや、御覽の通りの貧乏寺で實は考へて居つたのぢやが、お前が來て西堂をやつて呉るとなれば、餘計の心配もなし至極結構ぢや、早速行かう」と、胸中虚空の如き兩雄の相談は直ちに一決した。

愈々夏解の入寺式、五月二日になると環溪和尚は四十五名の雲衲を引連れて、心正寺へ到着した。然るに坦山は例の如く破れ鍋にお粥を煮て食つて居つたが、見ると意外にも米一粒味噌一重の貯へだもない、「これ一體憊する氣ぢや、今食べる物すら無いぢやないか」と流石の環溪和尚も驚いた。ところが坦山の搦揆が面白い「これは意外な事を聞くもの哉、元來先日の約束通り、江湖會をやつて法幢は衲が取る、江湖の



助化は「前がやつて呉ると云ふたではないか」と、平然たる様子は元是れ知音底の消息を語るもの、環溪和尚は恰も飛騎將軍の虜庭に入りしが如く、今更如何ともすることが出来ない。「よろしい法輪轉ずる處、食輪亦轉ずる、何とかしてやらう！」と翌早朝より環溪和尚は四十五名の雲衲を引率して行化三昧、九旬の安居首尾圓成して、多少の淨財迄残す、無食界中、一段の法味に飽滿して歸路に就かれたと云ふ。後日環溪和尚は「坦山の結制位骨を折つたのは衲も前後初めてぢや」と人に語られたと云ふことである。

法顯三藏の潜然たる涙

昔、法顯三藏が支那から葱嶺を踰え、更に雪山を横斷して千辛萬苦の末、印度に到着し、萬卷の經卷を携えて歸つた。斯う一言に云てしまへば何事も無い様であるが葱嶺や雪山を踰えることは當時に於ては非常な大苦辛である。それで斯る事を企てる

だけでも非常な勇氣を要するのであるが、況んや自ら決行すると云ふことはなかく容易の事ではないのである。

初め法顯三藏が支那を發する時には澤山な同伴があつたが、遺憾なことには葱嶺と雪山を踰える間に、多くの同伴は皆斃れて仕舞ひ、印度に達した者は法顯の外僅に二人。連も今日の探險と稱するが如きものゝ比ては無い、如何に大勇氣に富んで居つたか、察せらるゝてはないか。さて印度に着せられた後、フト本國の支那より渡來せる扇子を見て。涙滂沱たるものがあつたといふことである。之を彼の弘融禪師が批評して「斯人にして此涙あり、堅固なる意志は千萬の勞苦を排し、猛火の中をも辭せぬ氣概を持ち乍ら、又一方に於ては情愛溢れて、故郷を思ひ知友を偲ぶ、其消息如何ならんと、涙を禁ずる能はざる程に温き情を有し、而も智識は衆に優れて遂に傳法を完了したる、壯舉や、天晴の大人物なり」と云はれた。

實に此の法顯の一滴の涙は故郷慕はしい情一片の涙にあらずして、千辛萬苦、葱嶺

雪山の嶮岨を踏えし勇氣と、自身の身命に代へて佛世尊の教法を求めるといふ智とが、能く調和した處から溢れ出た涙である、この一滴の涙が弘融禪師に非常な美感を與えし所以であつて、吾人亦平日何事をなすにも此の智情意の調和を保つて行くと云ふことに注意せねばならぬ。

### 黄檗山門頭の扁額

一代の名優團十郎が歌舞伎の當り狂言、忠臣藏の勘平に扮して舞臺に上つた。方に切腹の場に到ると此處ぞとばかり渾身の技術を盡して、観客の喝采を得やうと努めたが、只の一人も稱揚して呉るゝ者はなかつた。斯くして數日、未だ伎の未熟なることに反省したる團十郎、深く自己の漫心を悔いて、眞實切腹の覺悟を以て舞臺上の活劇に一段の至誠を籠め、今や切腹の場に至ると、滂沱たる熱涙と共に双肌抜いだ、三尺の秋水キラ、輝く所、忽ち拍手喝采「千兩！」の聲は劇場中に響き渡つたと云ふことである。

一事一物、至誠より流出したるものに非ざれば名を爲すとは出来ぬ。山城宇治の黄檗山に至る者は必ずや三門頭に掲げある「第一義」てふ墨痕凜々たる額面を仰ぎ見てあらう、この額こそ、榮宗中古の祖高泉和尚の筆に成れるものであるが、この額面に就て一の逸話が残つて居る。

一日、和尚は這の額面を認めんものと同行者に一升以上の墨を磨らせ、丈室に於て大筆を執られたが、偶々和尚の高弟大隨長老傍にありて之を眺めて居た。聽て認め上げたる「第一義」の額面を手にして「これは第一義になつて居りませぬ」とばかり、速座に之を破却し去つたのである。和尚更に筆を握つて見事に揮毫を了へた、大隨長老「之も至つて拙劣い」と無遠慮に丸めて棄てた。和尚止むなく大隨長老の云ふが儘に亦書き改めたが、斯くすると八十四枚、和尚根盡き力抜け、筆を投じて大隨の酷なる處置を憤つたのである。

其時フト大隨長老立つて厠に入つた和尚其隙に乗じて、今回こそ大隨の心膽を奪ふばかりの文字をと、滿身の勇氣を一管の筆に聚めて書き了つた。所に現れたるは大隨長老である「是てこそ初めて黃檗山の門頭に鎮ずるとが出来ます」と手の舞ひ足の踏む所を知らぬ迄に打悦んだと云ふとである。今の世黄檗の書を愛好する者、其至誠の一端を知らねばならぬ。

### 吞海和尚と鐵牛禪師

往古吞海和尚、鐵牛禪師に問ふた話柄がある、其れが誠に面白い。吞海問ふて曰く「如何なるか是れ宗門向上の事」と、此向上の事と言ふは、今時門頭に落ちざる、父母未生已前の消息とか、又天地未開以前の事とか、乃至は、十萬億土の先とか云ふ様な、何か一つの珍らしき物體を、遠き處に求めた様子である、時に鐵牛禪師答へて曰く、「向上の事は且く措く、汝が脚跟下の事作麼生」と、其様な向上の事なぞと、有難

く尊び珍らしき物體を遠方に求むることは且く措いて、汝が脚跟下の足元の事はどうかである、天上の月をばかり貪り見て、手中の珠を失ひ、脚跟を名利苦惱の溝などには落すまいぞとし撈問である、吞海和尚云く「脚跟下大光明を放つ」と、此吞海幾分得る處有るものと見へ、左れば御座る、私の脚跟下は大光明を放て居ります、日々不染汚、没蹤迹の往來でありますと、答へたのである、然るに鐵牛禪師曰く「光明何の處にかある」と、鐵牛禪師は更に一撈を下された、所謂前箭は軽く後箭は重して、光明何の處にかある、若し脚跟下に光明らしきもの、尊い有り難い様なもの、佛法祖道らしきものが有たならば、眞個の物ではないのである、所謂味噌の味噌臭きは上味噌にあらず、悟りの悟りらしきものは、眞個の佛法ではないのであると、痛く一撈を與へられたのである、然るに吞海和尚「坐具を以て地を打つこと一下」と、偈て此の吞海這個の端的に至ては、言語道斷心行所滅て、生佛迷悟、有無凡聖と、言端語端に涉らば千里萬里である、故に、見んと要せば即ち見よ、聞んと要せば即ち聞け

よと言はんばかりに、坐具を以て地を打つこと一下したのである、鐵牛禪師は、更に一撈して曰く「未在更に道へ」と、鐵牛禪師は流石に老智識、此僧の五臟六腑も能く見抜き、此僧可なり至り得て居る様ではあるが更に再勘辨て、重々の詮索をせられて、未在更に道へと、まだく其様な働きは、畢竟、亂足轉歩であるぞと、把捉せられた、吞海和尚禮拜して曰く「今日親しく相見し了る」と、吞海和尚は、丁寧懇懃に禮拜して、今日は親密に、貴方に相見し了りました、と言ふたのである、併し、此の親しく相見すると言ふたのは、鐵牛禪師に相見したと言ふのか、又自己が自己に相見したと言ふのか、脚跟下の大光明に相見したと言ふのか、又は宗門向上の事に相見したと言ふのか、兎に角に親しく相見したと言へば、何物にか相見したかも知れぬ、此の相見の様子が、所謂「相逢て面を知らず、俱に語て名を知らず」で、此の境界に到得したときか、新舊對待を絶したる、眞の快活不徹ではあるまいか。

### 竹田黙雷の遊女禪

黙にして雷の如く、雷却つて黙に似たり、或時は放行或時は把住、殺活自在の機用をするてなくては禪僧の面目は立たぬ。されば今日禮法の根柢とせる小笠原流の抑も當初は京に響きし建仁寺の法式から出たと云ふて居る位、禪僧の起居動作たるや疊の上の一枚の白紙が動いても禮にならぬ。その建仁の管長黙雷和尚は亦瓢逸を以て聞えて居る。或時の春の夕は祇園の夜櫻に放屁一發、京美人の鼻を摘ませ、偶々興の湧く時は初對面の人にもかゝる大氣焰を浴せる。「世間の人には坐禪をするに深山幽谷でなければならぬやうに誤想して居る人が多い、實に困つたものぢや。コンナものが偶々綠酒紅燈絃歌湧くが如き高樓にても登らしめたらば、恰も猫に紙袋を被せたやうなものて譬込みばかりして随分見ものであらう、山棲の禪僧の眼から見ると、狹斜の街を惡魔の巢窟として、鬼が蛇でも棲んで居るやうに思つて居るが、其内容に到つては

却つて泥中の蓮華が中々多く咲き出すものぢや、何だか遊廓のものに物でも云ふと、身でも汚れる様に潔癖を氣取る禪者もあるが、ソナナ者に限りそれ自身が得て臭いものぢや、昔から御殿女中と坊主とは表裏裏醜と相場が極つて居るが、其邊になると醜業婦の方が淡白なもので存外美しく多い、衲は妓樓に大衆を連れてお經を讀みに出掛けるからよく知つて居るよ」杯と老僧に似合ぬ若い事を云つては參禪者を吃驚させる、心膽斗の如く洒脫自由の面目が躍如として居るではないか。

### 白樂天と鳥窠の問答

往昔、支那に白樂天と云ふ大詩人があつた。或時山中に入つて、彼の有名なる鳥窠を訪うた、時に和尚は大樹の枝の上に、鳥の巢を作りたる如く、端然として坐禪をして居られた、白樂天之を見て曰く「和尚は實に危険な事をして居るではないか」と、和尚乃ち眼を開き、願みて曰く「予が危きを爲すより、汝の爲す所、尙一層甚しい

てはないか、聽け卿は今妻子珍寶高位を抱き意氣揚々として、浮世にあてがれて居るが、一朝風の吹き廻しの悪く、其れ等を奪はれたならば、忽ち餓死するのであらう、是れ予が樹上にあるより、尙ほ卿の爲す所の方が、餘程危険である」と、出合ひ頭に喝破されたのである。樂天屈せず問ふて曰く「如何なるか是れ佛法的々の大意」と、師答へて曰く「諸惡莫作衆善奉行」と、樂天冷笑して曰く「三歳の孩兒も能く之を言ふ」と、窠曰く「三歳の孩兒も之を言ふと雖も、八十の老翁も之を行ふこと難し」と、實に言ふは易き事ながら、實行は太だ難く、八十の老翁も之を行ふ事は容易ならぬ事であると云ふ一言に、流石の樂天も瘦我慢の角を摧きて、大に佛教に歸依せられたと云ふ。

### 元良博士の參禪談

夏目漱石さんと二人連れて、相州鎌倉の圓覺寺に坐禪に參つたことがあつたよ、

左様サ今より三年も前の話だと、語り出されたのは吾邦心理學の泰斗として有名なる、故元良勇次郎氏「何でも實地に修養せねばならぬと思つて、寺の大廣間に、二人て肩を並べて端然と結伽跏趺座、宗演老師に教はつた通り、初めの程は氣息を調へ雜念を去るに努めて居たが、物の五分間も経ぬ内に姿勢が亂れた感じがする、組んだ膝頭がギク／＼と痛み出す、蚤が噛む鴉が啼く、這樣な氣がつき出すと、何時しが氣息は亂れて居る之ではならぬと氣を取り直す時は已に千萬里、わが行く道には遠去かつてゐるのである。

二日目になつた、少しは考へついた事を老師に話して見るが、相手になつて呉れぬ。麥粥を吸つて腹は減る目はくらむ、宅の事も心配になつて來た。これにも漸く打克つて、入室してから第七日目の黎明豁然として、星光を眺めた。其時初めて、世の中の事は理窟以外に悟るべき事、即ち修養せねばならぬ事の多くあることを知つたのである」と、謹嚴篤學、博士の如き人にして尙且つ斯うして苦勞もあつたのだ。古人は三

度親しく爪牙を弄するに遭ふと云うて居る、一人前の者になるには少くとも一度や二度は毒龍の爪牙にかゝるの覺悟がなくてはならぬ。

### 狼に三歸戒を授く

往古より其德禽獸に及びし事實の多々ある中に此に記さんとするは、肥後熊本壺井村の流長院第二世圓常宗鐵和尚である。或年出遊して豊後なる九重の山麓に於て、晝食をなして暫時休息せしが、其此草の上に紙入を置き忘れて出立した。翌日肥後の二重峠にかゝると、空腹を覺えたので、山中の事なれば人家とて別になし、草を敷いて丸食を喫して居ると、遙か彼方の森蔭より一疋の狼が何やら白い物を口に咬へて來る、和尚は妙な奴であると思つて不審を懷きつゝ見つめて居ると、彼の狼は更に怖るゝ色もなく漸々と和尚の面前近くに進みて來る、はてはいよ／＼妙な奴であるわいと思ふて居ると、やがて和尚の膝下にまで來た、よく／＼見れば、前日休息せし時に忘れ來た

紙入であつた。彼の狼はそれを和尚の許に置いて、殊勝らしく踞いて居るので、和尚も誠に奇異なる想をなし、食ひ残りたる握り飯を與へ、然る後ち彼れが爲めに三歸戒を授けてやると、狼は頭を低げ如何にも喜ばしい様な顔をして暫く立つと又元來し方へ歸り去りしと云ふ。此宗鐵和尚も亦古聖先徳に譲らざるの徳を備へたりと謂ふべきである。

### 鐵翁和尚の蘭

蘭を描く事に於て古今の名匠と傳へられた彼の長崎の鐵翁和尚、かつて慶應年間の頃、久留米の藩士某が或日和向を訪ふて、書を學ぶ事を請ふた、すると和尚は弟子に命じて、書を以て常に事へてをる人かどうかと云ふ事を聞かれた、某の答に「私は書を以て事へて居るものではありませんが、此度殿様が和尚の書風を慕はれて私に學ぶことを命ぜられたのである」と、和尚は之を聞いて更に弟子をして云はしめらるゝには

「老僧は近來多病の爲め逆も御所望に應ずることは出来無い、それ故平に御斷り申す」と、それを聞いては某も致し方がないと思つて、左様仰せになれば仕方もありませんから、何卒和尚のお描きになりし蘭を一枚是非共頂いて歸りたいものであると、云つて頼んだ、和尚は病中の事だから「書くことはいやである」と斷つた。されば御目になりとかゝりたいと頼んだがそれも承知してくれぬ。某も毎日斷はられてばかり居ても腹が立つばかり何の得る處もない、一日和尚が起きて居る容子を見たる件の武士、「今日は起きて居らるゝ様だから何卒一度だけ遇ふて下さるやう」と頼むと「起きて居るが面會は眞平御免蒙る」と斷る。「然らば某近作の野吟がありますからそれに御手数でも和韻をして戴きたい、それを土産として藩主に復命致しますから」と頼んだ。然るに「老僧は元來無學にして、詩歌、俳諧一つとして心得居るものなし」と言ふ。某もとうとう堪忍袋がされたと見えて、取次の弟子を睨みつけて曰く「われ和尚の徳望あるを慕ひて、遠くより來つて調を求むるに一つとして人の望みを容れず、今日はわ

れに覺悟あり」とて、劍を把つて將に丈室に迫らんとする、和尚は遙かに之を聞いて笑つて曰く、「衲は畫工で無いから畫を斷るのに何も不思議の事はない、今の天下は決して無事閑々たる時では無いぞ、幕府は徳なき爲めに浪士四方に散じ、諸藩汲々として武を講じ、兵を練りて大に力を盡さんとして居る。今は斯の如く武士の多忙なる時に方りて書を學ぶが如き、士人の行爲ではない、故に衲は謁を許さなかつたのである。然るに其の條理をも察せずして、主に復命の辭の無きに苦みて、衲が首を刎ねんとは何たる不心得のことである。衲が首を得ることは汝の自由に任す、されど蘭を得ることは到底出來まいぞ」と、某は此言を聞きて大いに悔いて去りしと云ふ。何人たりとも餘技に走つて、本務を忘れぬ様に心掛けねばならぬ。

○大燈國師の捨身禪

日月星辰一時に黒く、世は卍字巴と亂れたる足利の初代、御所なる京都の叢輩の下

にも似合しからぬ武士の試斬、一刀の眞價に人命を屠ることを屁とも思はぬ血氣の連中が、刀自慢のそむる歩き、加茂川畔を逍遙て人の往來を待つて居る。

人の心は皆一つ、誰しも好んで命を的に往來する者はない、加茂川の夕涼みもばたりと止まつて了ふた。之を聞いて大燈國師は、是れ屈強の試膽場、放身捨命は禪僧尋常の茶飯、好箇の禪床逸すべからずと、直ちに加茂川原を指して出掛けた。

盡天盡地一蒲團、泰然と坐り込んだ黄昏時、橋上の彼方に人の聲して、六尺近き血氣の武士三人、次第に此方へと近いて來た。見れば一人の禪僧、處もあらうに河原の中の坐禪三昧、刀の試斬には注文通りに出來て居る、「イザ貴殿より御試しあれ！」先づ「貴殿より」と國師の面前に於て下らぬ讓合、國師は燒物の巾着同様、何を云はれても口を開かぬ、默然兀坐、恰も白雲流水の境に在るが如き様子に、如何様不思議な坊主もあるものと、流石猪の如き野武士も心密に驚歎願視して終に刀を下す事が出來ず、逃ぐるが如く去り失せたと云ふとである。人空法空の理は朝飯前に會得しても



眞に捨命底の大活三昧に入るとは出来るものではない、大燈國師の擧や壯なりと謂はねばならぬ。

### 天桂禪師の船唄

「眼光落地作麼生が脱せん」生死去來は素是れ人生の常相とは謂ひ乍ら、無孔の鐵槌幾度か此門を撃つても、大乘の根器に非ざるよりは、生死の關は依然として豁開の時節はないのだ。天桂禪師は婆心深くこれに鑑み、船唄に作つて生死無常の理を童蒙の輩に示されたとがある。夜半人静まるの時、心静かに微吟すれば、  
あれはいづこの船ぢややら、生死無常の大海に、風にまかせて乗り出す、四大の板を借り集め、出入の息のかりの釘、心一つの帆柱に、眼耳鼻等の六枚帆、帆を十分に引上げて、まともに行くはよけれども、ちと傾けて開くのが、船ののりての上手さよ、表楫、取楫ゆるすまじ、いづれのかたとあてどなく、灘を知らざる船頭は、

覺束なくも思はるゝ、貧苦艱難火事水難、その外いろ／＼難のあるもの、必ず無理に乗り切らうとせず、おちつきて天命の風まらせるがよい、曠患の浪の立つ時は、早く碇をおろすべし、放逸懈怠のすさまより、貪欲水の垢入らば、中の寶はみなすたる、信心のよくまきはだを、よつくさめこむものならば、終に港に入りぬべし  
舟と水中よくてこそ世はわたれ

こゝろにあらき浪かぜぞうき

と、一讀清風匠地の感があると共に、亦是れ漆桶打破の秘鑰となるのである。

### 天臺山上の寒山拾得

支那に有名なる天臺山國清寺に豐干禪師と云ふ高德が居つた。折しも其會下に仕へて居る二人の僕童、一人は寒山と云ひ一人は拾得と云ふた。或時、閭丘胤と云ふ信者が山に登つて豐干禪師に面會を求めた。其時禪師に向つて云ふには「今寺の臺所に於て

二人の妙な僕童が働いて御座る、彼等は何者であるか」との間に、禪師は聲を潜めて「彼は文殊普賢の化身で御座る」と教へた、閻丘胤驚いて臺所に走り、寒山拾得の兩人を丁寧な禮拜した、二人は怪訝の顔付「貴下は何故ありて吾等を禮するや」と言ふと「只今禪師より承りませすれば、文殊普賢二菩薩の化身で御座るとの仰せ、世に逢ひ難き仕合せと禮拜致します」と聞いた通りに告げると、寒山拾得口を揃へて曰く「豊干饒舌」餘計なことを言ふもの哉「彼の豊干和尚こそ阿彌陀の化身である、吾等を禮拜するよりも、去つて、豊干を禮拜せられよ」と告げた。閻丘胤忽ち方丈に登つて、豊干禪師を禮拜せんとすれば姿が見えぬ。又臺所に至つて二童を禮拜せんとすれば二人の姿も見えない、遂に三人共姿を隠したと云ふ奇談がある。寒山詩に「安心の處を得んと欲せば寒山長く保つべし、十年歸るとを得ずして來時の路を忘却す」とある、傳燈録中の一節をそのまゝ。

### 何でも禪門第一の人

乃木將軍殉死の際、其弔電に「萬歳々々萬々歳」と發して折柄邸内に並居る諸將軍の心膽を寒からしめたる南天棒鄧洲和尚、現今幾多の名師中、豪放英邁、機鋒峻辣なる點に於て禪門第一の稱を擅にして居る丈に、流石青年時代の修養振は決して尋常一様ではなかつた。

山城國綴喜郡八幡町なる達磨堂の畔を逍遙する者は、蒼々たる松樹の鬱乎として中天に聳ゆるを見るであらう、實に其丈十六間餘、これなん安政五年の雪安居中、和尚少壯氣銳、精勵絶倫、恐るべき井戸と言ひ傳へられし底無し井戸の上に板を渡して端然と結伽趺坐、衲必ず正覺を成せんと誓を立て、一尺三寸の松を持ち來つて井戸の側に栽ゑて置かれた。

斯くして和尚は前後六ヶ年間、少しも横臥せず、或時は夜陰墓地に赴いて石塔の上

に打坐し、或時は雪中水垢離を取つて寒風裡に悠麿の事を工夫する、其修行に熱心なる態度は實に古聖先徳に遜色なき有様であつた。

春風秋雨既に幾十年、得意の南天棒を挈げて諸國の僧堂を廻り、遂に今日禪界の第一人たるに及んで、一尺三寸の松は一丈六尺になり「南天棒自誓松」と稱して、後人修養の龜鑑になつた譯である。

和尚は亦少壯時代より船若湯を好み、會つて久留米梅林寺羅山和尚の會下にある時の事である。一日大會の開かれた折、一山の馳走にと用意して置いた酒樽にコツソリ罇を穿ち數日の内一斗の酒を飲み竭して了ふた。これが發覺して大衆は驚く山主は呆れる。大騒ぎを演じたとの事である。

或時は往來の酒舗に飛込み、五升の清酒を見る間に飲み干し「人が鬼か」と主人に怪まれ、一里も跡を跟けられた事もあると云ふ。

和尚は斯の如く豪酒で僧堂隨一たるのみならず、膂力に於て、修行に於て、所得堅

固なる上に於て、機鋒の峻辣なる點に於て、眞に禪門第一人であらう。

### ○ 慧鬼の膂力鬼神を走らす

支那に釋慧鬼といふ僧があつたが、頗る人生の妙味を悟つて、山中に入つて心靜かに坐禪をしてゐた。すると其山の鬼神が之を見て慧鬼の荒膽を挫いてくれやうと思つた。併し慧鬼は悟道の知識で容易に物に驚くやうな人物でないに依て、何とかして彼を驚かして見やうと工夫し、到底平凡大抵のことではいけぬ、一つ怪物と化して見やうと思ひ、頭の無い鬼となつて慧鬼の面前に現れた。すると慧鬼は之を見て「如何にも面白い怪物である、頭が無いから定めて頭痛がせぬて宜しからう」と云つた。鬼神は之を觀て大いに狼狽し、今度こそはと、腹の無い怪物になつて現れた。すると慧鬼は一向平氣で「此怪物には腹が無い、定めて腹が立たぬて宜しからう」と云つた。是に於て鬼神も大いに残念がつて、有らん限りの神力を盡して、種々異様なる怪物とな

つて現れたが、慧鬼は平氣であるので、鬼神の方で驚いて逃げ去つたとのことである。

### 久保田米僊心眼を開す

凛々たる孤風自ら誇らじと雖も、寰海に端居して龍蛇を定めるの機轉あるは、黄檗宗管長高津柏樹翁であらう。翁が禪書を提唱するや字句に拘泥せず、一種特得の妙所ありて、人をして自づと禪の堂奥に入らしめずんば止まぬと云ふ風がある。曾つて山田寒山の宅で碧巖録の提唱をした時、恰も其頃失明した故久保田米僊壽伯の座にあるを見て、翁の婆心、例によつて文字外の禪を拈得し、死中に活を説き、活中に死を述べ、拂拳棒喝を弄せずして、而も七縱八橫、實際問題を捉へて因果の法を述べたので、米僊の心眼頓に開發し、未來迄の恩人として厚く敬服して居られた。

當時、黄檗宗本山山城宇治の萬福寺が管長の缺員となるや、翁に旅費三十圓を郵送して請待して來た。時に翁はこれ管長を迎ふるの禮でないとして卻けたが、其後八年、明治四十四年漸く管長たるべく餘儀なくされたとの事である。

### ○ 慧能和尙の判決

支那の國、法性寺と云へば知らぬ人なき禪宗の名刹、長い敷石を過ぎて進めば高い石段がある、石階を登りつめると廣い庭、庭には高々と押し建てられし幡の竿、竿の頂にはそよ吹く東風に片々たる白き幡、此の幡を禪宗にては刹幡と申す。刹幡の下に寄り來りし二人の雜僧、雜僧と云へども禪宗坊主は元氣が良、寄ると障ると氣拔な問題が押つ初まる。「奈何である幡宗長老、此そよ風に吹き靡かせられし幡の狀、げに勇ましいては無いか」幡宗長老この話を聞くや否や「馬鹿を云はるゝな風禪上座、幡には幡の自性あり、恁麼ぞ風などに吹き靡かせらるゝ者ぞや、是れ決して風に動ぜらるゝに非ずして幡自らが動くのである。」喧嘩を持ち掛けられて四十八手の奥の手の逃道ひらくは禪僧ならずと心得たる風禪は「否なゝ幡が自身で動くに非ず、風が動



現今の諸所にある叢林なるものと、昔の叢林なるものとは大いに異つて居る。殊に今日の學林と、古の所謂學寮なるものとの差は實に甚だしい、従つて昔の雲水の修業たるや、今日の放逸に流れ無責任なる雲水のものとても想像の及ぶ所ではない。畔上椽仙禪師も又其昔の雲水の苦學者の一人である。學ぶには充分なる學資がないからして、止むなく病氣と偽りて、朝の行持を缺きて窓かに門外に出て托鉢をし、それより得たる淨財を以て書物を買ふたり、又は時々請したる教師に御禮をするのであつて誠に悲しき境涯であつた。三度の食事ですらも充分でないから、夜の十時頃になると空腹になつてくる、故に燒芋を買つて食すが、其の燒芋のなき事あれば、薩摩芋のなきの奴を買つて來て、行燈の火で灸ふつて食ふと云ふ始末、又入浴すると云ふても學寮にないから、他に行くことゝなつて居る。

丁度其時分に小石川白山下に、一寸小奇麗な湯屋があつて、學寮の生徒は多く此へ行つた。併し大抵月に三四回位が普通で四九日に入浴するものは上等の部であつた。

然るに禪師は一ヶ月に漸く一回であつた。禪師が入浴に行くと湯屋は大變に迷惑であつたさうである。それは何故かと云ふに人よりも先きに入つて、一番あとから出るので随分長い時間をつぶした、如何なる譯で斯く長時間を費せしかと云へば、禪師は自分の身體を洗ふばかりでなく、友達の脊を一人一人洗つてやつたのである、之は無理に人に強ひられてやるのではない、自ら願心を起してやるのであるから、尠しも誇りとせなかつた。

元來禪師は天性敢て聰明伶俐といふてもなく、又物覚えなども人よりはかくしく進まぬことを深く歎かれ、何卒一人前の僧侶となりたいものと云ふ、正しき發心より出てたる行持であつたのである。

### 一切平等の徳行

盤珪禪師が或る所の安居の請に應じて參つた、然るに其處の味噌は非常に悪く、よ

つて典座の大靈といふ御弟子が、年とつた禪師の身上を氣遣、悪い味噌を喰べさせてはならぬと言つて新しき味噌を取り寄せて差上げた、盤珪禪師之を喰べて「昨日喰べたのと違ふがどうして斯う云ふ味噌を持つて来たか」と問はれた、大靈答へて「どうも彼の味噌は良く無い、貴方の身體に障つてはならぬから上等の味噌と取り換へました」と言ふ、處が禪師は「それぢやお前は私に物を喰べるなといふと同じ事である」と斯う言つて、其儘一室を閉切つて出て來ぬ、そこで大靈も誠に申譯が無い、誤つた事を致しましたと云つて涙を零して御詫をしたが禪師一向聴かぬ一週間が程も出て來ず何も喰べない、大靈も仕方が無いから方丈の間の外に在りて喰はず飲まずに毎日毎日「どうぞ御宿を願ふ」と言つて居るが許されぬ。

そこで大衆一同の者が集つて御詫びに行く「左様か納は大靈が喰はずに居ることを知らなかつた、それならば納が出てやる」と言つて天石窟でも明けるやうに方丈の間を明けて來て、是から大靈に「貴様に言ふて聞かすが、納は人の上に立つてその模範となるべきものである、それを己一人が他の者より變つた食事をして旨い物を喰べるといふやうなことは不都合極まつた話してある、大衆一同の喰べる物を喰べねばならぬ、如何なる高德な者でも皆と同様な物を喰べるやうで無ければ本當に人の模範となり人の精神を訓練する道で無い」と言はれたと申すことである。

盤珪禪師の行ひは實に一切平等の徳を體し何人に對しても少しも依怙最負が無い即ち我を捨てたところの斯様な行ひが段々積重つて行けば、實在の大なる生命ともなり、遂には完全圓滿な人ともなり得るものである。

### 大徹老漢の般若湯

明治四十四年二月、八十二歳の高齡を以て東京市本郷動坂の禪室に寂を示された大徹道林禪師は稀世の英傑であつた。禪師は明治初年廢佛毀釋の聲天下に喧しき頃、當時尤も勢力を逞うした神道の本家郷、伊勢國神宮寺の住職として、時の縣令と闘つた

と云ふ奇談がある。「三界の大導師たる衲に向つて、生意氣にも苗字、帶刀、馬一匹を  
 進上するから還俗せよと勸めるのぢや、禪坊士に三尺や四尺の刀一本何になる、況し  
 て馬一匹貰ふととて馬車引もなれんぢやないか、衲にそんなケチな真似は出来んによ  
 つて御免を蒙る、否、衲一人ばかりではない、衲の末寺の和尚等でも必ず還俗など、  
 下らぬ真似はさせぬから、その積で居て呉れと、官に向つて斷然言ひ切つた。する  
 僧侶であつても劍道を知らぬ者は、素裸にして寺から放逐すると云ふから、衲はそり  
 や面白、元來禪坊主は三界不住、青空天井ぢや、この法衣に手を掛けて見事素裸に  
 して見なされと、怒鳴つてやると、官の役人とか縣令とか云ふても存外弱いもの、衲の  
 法衣にはよう手を掛けられんのぢや、何でも禪坊主は定力を練つて、真逆の時に殺活  
 自在の機用をせにやならぬ」と、禪師は大嗜好の般若湯を口にし乍ら語られた事があ  
 つた。

古稀を超ゆるも活氣縦横、何時も貧乏徳利を側に侍らして、風邪を引いても二升位  
 を下げてウンと下腹に力を入れれば、直ぐに治つて了ふと云ふ有様、殆んど遷化當時  
 迄般若湯に親しんで居られた。

この大嗜好の般若湯を全く禁じた時代がある、开は禪師の南禪寺管長時代の事であ  
 るが、前述の如く維新當時廢佛の影響を蒙つて、京五山の隨一たる南禪寺は堂塔荒廢  
 寶藏は中味のまゝ質に置かれてあつたと云ふ有様、これ此儘にして置けぬと、禪師は  
 住山早々大觀と云ふ一人の侍者を供ひ、九州さして淨財勸化の途に就いて、信者の淨  
 財を募るに方りては先づ第一に我身の嗜好を止めんと覺悟して巡錫中は曾つて一滴も  
 用ひなかつた。然るに一日、肥前の某寺に到ると、住職は豫て禪師に隨侍して居つた  
 牛島鳳洲和尚、禪師第一の好物たる般若湯は巡錫中嚴禁との觸込に對し、窃に茶器に  
 盛つた伊丹の名酒「禪師粗茶を」と勸めた。一見それと知つて「當國の茶は酔と度  
 なし容易に服すべからず」と云つて斥けられたので、鳳洲和尚呆然として言葉なく、  
 之を聞傳へたる人々は益々其道心の堅固なるに驚き歸仰したと云ふことである。



白圭元來玷無し、圓轉自在の活作略を將ふるとも誰れか其眞價を辨ずることが出來やう、禪師の如きは隨波逐浪、機に臨みて酬唱せらるゝ、本分底の那人と謂ふべきである。

### 小僧の頓才と赤松圓心

赤松入道圓心は禪法に達した人であつたが一日外出の序に禪宗の寺らしいのが見えるので、一つ和尚に遇うて問答をしやうと思ひ、山門の前まで來ると、小僧が土を掘つて、遊んで居た。先づ此小僧から試して見やうと、「小僧や、此寺は何と云ふ寺である」小僧「御前は何と云ふ男である」。此小僧中々やり居るわいと腹の中に考へつゝ、圓心「拙者は赤松入道圓心である」小僧「此寺は別法寺である」圓心「然らば汝に一問あり、許すや吾や」小僧「許す、何事なりとも問へ」。おのれ小僧め小癪なりと少しく噪き込んだる圓心「然らば問はん、法に別法なし、如何なるか是れ別法寺」小僧「松

に古今の色なし、如何なるか是れ赤松」。是に於て赤松も大いに驚いて、小僧でさへ此位の力量があつては和尚には到底及ぶ氣遣は無いと、其場所から立歸つたといふ。

### 雪潭犬山候に簾を撒せしむ

山門の上より身を投じて門下に墜死せんとして、脚已に千仞に臨んだ一刹那、忽ち鶏鳴を聞いて豁然大悟したる、彼の雪潭和尚は諱を紹璞と云ひ、紀州牟婁郡大田村の人であつた。元來和尚は聰明英敏の質にして、氣宇高邁と云つたやうな人であつた。五六歳の頃已に文字を學び、一度習へば忽ちにして暗誦すると云ふ位、時の人は皆之を呼んで神童と云つた。

雪潭は濃州の龍福寺棠林について遂に印可を得た人であるが、後に美濃の正眼寺に住して、盛んに參禪の人を接化したのである。然も彼れは熱喝噴拳、雷聲怒罵と云つたやうな工合で、其門庭の嶮峻なること棠林に十倍して居つたので、人は之れを雷鳴

和尚と云つて居つた。然し餘りに惡辣なるより大抵の人は望んで退く者が多かつたとの事である。雪潭或る時尾洲の瑞泉和尚の請に應じて臨濟録を提唱したことがある、其時に犬山城主も亦臨聽して居つたが、城主は簾を垂れて聞いて居た。すると雪潭講座に上るや、之を見付けて大喝し曰く「何人ぞ簾中に座して、老衲が提唱を聽かんとは、衲は今正法を擧揚して居るのに其有様は甚だ禮を缺いて居る、疾く簾を撤し去れ、若し撤し去らずば、衲は決して法を説かない」と、その聲殆んど百雷の如くにて、そこに居並ぶ多くの人々皆色を失つた。犬山候もやむなく簾を取り去つたと云ふ。實に其機鋒の峭峻なること、貴顯と雖も敢て決して憚らぬ、眞に禪僧の氣慨想ふべきである。

幽靈眞龍の一著に度脱す

大正の今日、幽靈退治の奇談も相應しからねど、仔細に辨得すれば亦是れ化門の一

波瀾。所は東京府下荏原郡世田ヶ谷村、伊井掃部守の菩提所として有名ある大溪山豪徳寺内の出來事である。

事の起りは中國の一寒村に曹洞宗の寺があつた。和尚は禪僧に似げなき有財餓鬼、金錢の爲めには何物をも顧みぬと云ふ有様、然るに幼少より養育されたる一人の小僧最早相當の年配にも達して居るので、是非共世間並に立職をして長老様と云はれて見たい、依つて和尚に幾度か嘆願して見たが、和尚は經費を惜しみ聞入さうもないので、小僧は終に惡心を起して和尚の在金陵つて出奔し、隨時に立身しやうと考へた。時しも小雨を降る秋の暮、和尚の寢靜るを待ち構へて抜き足さし足枕元へと近寄つた件の小僧、和尚が命の綱と大切にして置いた金財布へと手をかけた。屹驚仰天目を醒した和尚の見幕に、小僧は一大事と前後の分別もなく、和尚が護身用の枕刀を取るより早く和尚の眉間目懸けて切り込んだ。斯くして殺害したる和尚の死骸を其儘に小僧は後白波と雲を霞と逃げ去りて、武州豪徳寺に參り、首尾よく掛搭を許されて

聽て立職の相談も整うた。愈々法戦の當日である。門前より入り来る田舎の和尚、見れば郷里にあつて殺害したる本師であるので、首座は大いに驚き、直ちに走つて須彌壇の裏に隠れ、袈裟を頭より被りて潜んで居た。和尚無言の儘寺に入り來りて須彌壇の周圍を廻り乍ら、頻りに探る事約半時ばかり、最早彼方へ立去りし後と頭を擡げて後方を見た。其時、「己れ此處に居つたか」と、獅子奮迅の勢、突如として首座の首を押へつけたが、首座の息は其儘絶え果て、了ふた。様子を眺めてニッコリ笑ふて件の田舎坊主は、搔き消す如く消え失せた。之れ乃ち前に殺害に逢ふた和尚の亡魂が怨念となつて、斯の慘事を敢したのである。

爾來一年兩度の結制に、法戦當日となるや首座は第一位に着くと、不思議にも何時も抛り出される、其都度何者とも知れず「首座は誰れた」と叫ぶ物凄さ、爲めに豪徳寺に於ては一時結制を中止するに至つた。後に止むなく首座の木像を造りて之を常住不斷首座位に安置し、一年兩度の首座は第二座に著くとにした初めて事なきを得た。

然るに中世の英傑真龍和尚、一度豪徳寺の主席を董すや「柄一番眞の幽靈を退治せん」と、法戦當日件の木像を取り除け、自ら其首座位に坐して結伽三昧、折しも例により幽靈出て來り、真龍和尚に向ひ「首座は誰れた」と奇聲を發した、和尚すかさず「首座は御前ぢや」と大喝一聲。瞬間、師匠を殺害して迄も長老にならんと企て、其怨靈に命根を坐斷され、中有に迷ひ居たる首座の迷執は忽然として度脱するを得たのである。

爾來幾星霜、豪徳寺内幽靈再び現れず、件の木像は須彌壇下に放擲されしまゝ、今尚ほ傳へてありと云ふ事である。

### 正受庵老人

無難禪師と白隱和尚との繫鎖をなして居る者は、信州の正受庵老人である。即ち無難は老人の師匠で、白隱は老人の弟子である。老人諱は慧端、字は道鏡一名を的翁と

正受庵老人

云ふ、信州飯山侯松平遠江守の庶子である。老人生れて狀貌魁偉、氣宇寛宏、有眼の者來つて一見せば、忽ちに其凡骨ならざるを知ると云ふ態度。十三の時、諸公子と共に、一老宿に就き佛名を書して勝縁を結ばんことを請ふた。老宿即ち老人の面貌を熟視して後曰く「但だ子には與へず」と。老人其故を問ふ。老宿曰く「子は個の觀世音なり」と。老人重ねて問ふ。「何物を指して觀世音と謂ふか」曰く「自己に問取せよ、別人に問ふ勿れ」。老人沈思すること多時、是れより疑を懐くに至つたのであるが、抑も此の疑こそ大疑であつて、此大疑のためには、起つて坐を忘れ、坐して起を忘れ、寢食を廢して疑つたのである。

老人は大疑を懐いて實究すること四年。一日閣に上り、楷梯の半にして疑團現前し、凝然として動かず、須臾にして梯子より頓墜し氣息絶す。衆驚愕して水を洒ぎ相號ぶ、老人忽ち蘇生し、豁然として大悟し、手を拍つて呵呵大笑した。此の大笑こそ、釋迦阿難に非ざれば、會し難い大笑であつたが衆人相見て風狂としたのである。老人衆評に關らず其の悟る所を證せんと欲したけれど、固より僻境の事として識者なく、愈々益々勵精し、人を避けて兀坐し、潛修密練して居つたのである。

老人十九歳の春、侯に隨つて江戸に出て、都下の知識を歴訪する七八、皆の其の意に愜はなかつた。當時麻布に東北庵と云ふがあつた。無難和尚愚堂國師の印を帯びて是に住して居つた。老人行いて謁を乞ふや直ちに視線往復して自ら師弟の契が出来たのである。愚堂國師は元是れ有眼の老漢、老人を以つて大器と爲し、又師を選択する老人、共に無目の徒の企て及ぶところではない。

東北庵雨漏ること甚し。一日和尚老人に命じ、架上に登りて屋根を覆はしめ、杖を以つて下より其の足を極して曰く「香嚴樹上作麼生、速道速道」と。和尚老人に接するに惡辣の手脚を以てすること大抵斯くの如くであつた。然し老人は斯る手段にオメくする程の鈍漢ではない。參究不倦、遂に佛祖の骨髓に徹透したのである。

爾後去つて東奥に到り、虎哉、一源等の諸老に參じ、復び江戸に歸つて無難和尚に

謁す、和尚國字書を授け、「是れ予が睡中の譚語なり」と謂ふ。老人兩三紙を披閱して、起つて之れを爐火に投じ、「老漢什麼をか作す」と竹筥返しを撃つ。吁是れ眞の獅子兒ではないか、無難和尚亦此の獅子兒を得て、痛快言ふべからざるものがあつたであらう。

老人は和尚の進む一切を固辭して「弟子不徳、都下の院に住するに堪へず、専ら山林に隠れて道體を養はんと欲す」と云ひ、即ち信州飯山に歸り、上倉村なる幽邃の地を選んで草庵を結びて正受庵と呼び、母と共に隱居して居つたのである。

### 鳥尾得庵劍道の極意

山岡鐵舟は宮内大輔の役を勤めて居られた頃、或る日曜日であつた、鳥尾得庵居士が山岡を訪問した、すると鐵舟は何にか書き物をして居る「あゝ鳥尾さん御來意は如何なる件なるか承りませう」と云つて、同じく認めものをして居られた、鳥尾將軍

曰く「本日伺ひましたのは別な用件ではありませんが、愚生は身を軍籍に掛けて居りますが、劍道は甚だ未熟である、て先生に劍道奥儀の指南を仰ぎ度參上致しました」鐵舟曰く「ア、左様ですか、私は劍道の奥義を淺草の觀音へ預けて置きましたから、若し御常望ならば親音へ往つて、御相談否御受取をして貰いたい」鳥尾將軍曰く「左様で御座りますか、それでは淺草觀音で受取ることに致します」と云ふて、還へつて仕舞た。

其後一週間に、鳥尾中將とくくやつて來て鐵舟に向ひ「いや先日は誠に失禮致しました、先生の御指揮に従ひ淺草觀音にて、正しく劍道の極意を授かりまして、實に快感の至りてあります、今日は一寸御禮に出ました次第で御座ります」鐵舟曰く「あゝ左様でしたかそれは結好益々御膽練が必要であります」あゝ此會見此談話は局外者には恰も狐を馬に載せたやうな話だが、實は鳥尾中將は一周間觀音へ祈願して劍道の奥義を授かつたと云ふのは、淺草の觀音の正面にあがつて居る「施無畏」と云ふ額

を見て豁然として、省悟したのである。

### 盤珪禪師と王陽明

盤珪禪師嘗て老母のために明々徳の理を聞かしめんと欲して、山に入り屍をまくりて岩上に坐し、血生ずるまでの苦心をなし、儒者に問うたが尙ほ明らかならず、それより誠を禪門に傾け殆んど肺病になる位に辛苦した効果空しからず、ふとせし事より佛心を明め、眞言門に阿字本不生と云ひ、生ぜず滅せざるが不生なりと、云ふに至りて豁然として悟り、特に長崎の長源道者に證明を乞うたと云ふ。故に禪師一生の間不生の佛心より外に説かず、喫茶喫飯の上、人と交際する上に就ても、唯だこれ不生の佛心を以てした、俱低は一指頭を以て一生受用不盡、陽明の悟つた處は良知良能である。故に陽明にありては命、性、理、共に皆之れ良知なり、吾人の生命と良知とは二にして不異なるものである、陽明か此理を悟つたのは、實に彼が龍場と云ふ蕃地へ左

遷せられて、世上の毀譽褒貶は一切凡て忘れ果てたが、然も生死の一念はこれを忘るることが出来ず、是に於て自分の住んで居る屋後の岩窟に入りて禪定に入り、孟子の夢を見て良知良能を説かれて悟つた。實に彼の一代の事蹟を察するに、其苦辛は常人の忍ぶべからざるを忍び、道に志して艱難を重ねたるの結果、始めて悟得した處である。彼が一代の言説は通常の學説ではない、唯其理論のみに走つて説をなしたものは大いに其趣きを異にして居る、即ち實地に學得した處を以て眞の學説を立たたのである。

### 屍體は喰へぬ

故清澤滿之師の生涯は明治教界の明星であつた。師嘗て京都に居られた時、非常に嚴肅な禁慾主義の生活を實行せられて居たことがある。居を洛北白河村に構へて、寒い冬の日にも毎朝六時に勤まる本山の晨朝勤行に參るとして、二里近い道を一本齒の下駄をはき、麻の法衣を纏ふてテク〜と通はれた。其頃、師は全然魚肉を喰べられな

屍體は喰へぬ

かつた、或人が師にその理由を尋ねた、すると師は「どうも、死んだ魚の屍骸を見る  
と喰べる気がしないからな」と答へられた。

然し憊んな生活をせられた爲めてあつたものか、後終に肺患に悩まざるゝに至つた  
師の友人等は非常に心配して、師の禁慾生活を誠め、攝生すべきことを勧められた。  
師はじめ仲々聽かれなかつたが、終にその友情に感じて「それぢや、私の身體は君  
達に任す」といつて、それから友人のいふが儘に須磨などへ行つて病を養はれた。

### 恥かしい哩と峨山和尚

天龍寺の故峨山和尚は、生前和尚の居士や大姉が東京に澤山有つて、その爲に始終  
東上せられたが、或年のこと、道生會の世話人なる某寺の和尚が、一日和尚の許に  
遣つて来て云ふやうは、「〇〇老師は講座の上で淨瑠璃が出る、端唄が出る怒罵呵咄疾  
風暴雨、殆んど端睨すべからずと云ふ風で、頗る東京人士の人氣に投じ皆なの者面白

い／＼と云つてゐましたから、チト老師もさう云ふ風に御願ひがしたい」と云ふと、峨  
山和尚は恰度風邪で寝て居られたが、忽ち蒲團を頭から引つ冠つて「俺はのう、恥し  
くてそんな事を云ひ得ぬわい」と、云はれた時にはさすがの世話人和尚も、赤面して  
退いたと云ふことであるが、丸て峨山和尚を目の前に見るやうだ。

### 鐵舟居士臨終の消息

山岡鐵舟居士は十三歳の時に志を立て、思ふやう、武士たる者が君に事ふるには  
先づ死を視ること歸るが如く、確乎不動の信念に住せざれば眞に忠を盡すことはでき  
ぬ。不動着の信念は心膽を鍊磨するにある。と斯く思ひ定めて父親の朝右衛門に心膽  
鍊磨の方法を問うた。其時朝右衛門の云はるゝに「吾家の御先祖高寛殿は劍法を小野  
治左衛門小太刀半七の二人に學び、又禪學の蘊奥を究めて、東照神君に奉仕し、屢々  
戦功を立てられ、其旗には「吹毛不會動」の五大文字を題したのをお用ひになつた。

今其方も心を鍊らんと思ふなら禪を修むるに如くはない」と、是に於て鐵舟は始めて芝村の長徳寺なる願翁和尚に參じて十年の春秋を經過したが願翁和尚は未だ大事透得を許さなかつた。併し鐵舟は少しも志を挫かずして、伊豆の龍澤寺なる星定和尚に參じたが、龍澤寺は三島驛の西一里許の所にあるので、鐵舟は休日毎に拂曉に江戸を出て、騎馬で箱根峠を超え、其夜の四更に始めて龍澤寺に至るのである。寺に着けば直に星定和尚に參じて、後に飯を喫する、斯様にして如何なる熱時も將亦寒時に至るも休まなかつた、これが非常なる身心の鍛鍊になつたに相違ない。何となれば一方に於ては長途を騎馬で旅行して身體を鍊り、他方には夜中箱根の嶮を冒して精神を鍊ることが出来たからである。後には鐵舟は今北洪川、由利滴水、萩野獨園などに參じて遂に滴水の印可を得た。

鐵舟の劍法は禪理の上から悟入したもので、彼れは九歳の時より劍道を學び、眞影流を久須美閑滴齋より授かり、後に井上清虎に就て北辰一刀流を學び、最後に淺利義明の門に入て一刀流の奥義を究めんとし、頻りに苦修を重ねつゝあつた。或一日滴水に參禪のとき劍道の事を語ると、滴水が、

兩刃交鋒不須避 好手却同火裏蓮 宛然自有衝天氣

の句を擧げて授けられた。そこで鐵舟は此句を日夜に拈提して三年に及び、一旦豁然として眞發する所があつたので、馳せて淺利氏に見えて、立合をして見ると、不思議にも、太刀尖が鋭く、技能の神妙なる所、平生と全く別人のやうであつた。淺利氏は大いに驚いて木劍を地に抛て云ふ、足下は最早充分の腕前となられた、吾一刀流の秘訣を御傳へ申さうとて、遂に一刀齋の所謂無想劍の極意を授けられた、其時は明治十三年の三月三十日であつたといふ。

これより鐵舟は愈々劍法を精究して、古人未發の蘊奥を明らめ、無刀流と稱する一派を開創して門弟に授けた。鐵舟が劍法を精究したり、禪學を修めたりした目的は君の爲めに忠を盡すにあつたのであるが、適幕末の際で、官軍は大舉して關東を征伐



することゝ爲り、西郷等は大軍を擁して、江戸城に通つた、時に鐵舟は勝海舟と力を  
 協せ、死を冒して其主徳川慶喜の恭順を告げ、官軍は一兵に血らずして江戸城を收め  
 百萬の生靈が塗炭の苦みを免るゝことを得たのである。明治の初年に排佛論が朝野に  
 盛んであつた時、鐵舟は「天下を擧げて皆他教を信するも我一人佛教を信して可なり」と云つて動かなかつた。且つ明治廿年七月以來、一切經を書寫するの願を發して、毎  
 夜四更まで寫經し、駿河國には鐵舟寺を建て、東京へは全生庵を建立するなど、非常  
 に信仰の深い人であつた。

鐵舟は明治廿一年二月より重病に罹り、七月の中旬には死期の近づいたことを知つ  
 て、親戚や門弟を集めて、愉快に談話し、且つ圓朝を招いて落語を聞き、談笑するこ  
 とと平常の如くであつた。圓朝は鐵舟に就て參禪したのである。此重病の中にも彼は  
 寫經の日課は少しも怠らず、同月十九日には早朝に起きて浴室に入らんとしたので、  
 門人が扶持しようとする、彼は之を斥けて、自ら歩いて浴室に入り、澡浴了つて、

夫人に着物を出すやう命ぜられた。夫人が平常の夜服を出すと、其着物ではないとい  
 ふ。そこで夫人は鐵舟の意を悟つて、泣いて豫め用意の白衣を出すと、自ら之を衣て  
 病床へ坐し、煙草を一服吸ふて結跏趺坐。金剛經一卷を懷ろにして右手に團扇を執  
 り、左手にて念珠を持して從容として左右を顧み、親戚門弟に訣別して云ふ、「諸君健  
 在なれ、吾今日先づ逝かん」と言ひ卒つて微笑し、五十三歳を一期として瞑目した。

萩野獨園和尚が鐵舟吊祭の拈香に

前之無敵後無物 五十二年不會禪

莫道出生還入死 薰風香動碧池蓮

恭惟

全生殿鐵舟高步大居士

希代英傑 蓋世大人

爲君振勇則橫行於百萬軍中如往無人之地爲道忘軀則跋涉於三百餘里如遊比隣之家

雖日坐擊劍道場而途中家合竹椅蒲團爲座雖常在簪纓社會而江山風月虛懷冰襟爲伍此乃人天化生、爲法而來、是故病苦之際、快然以書寫一代藏經、此是世間了事凡夫、亦謂菩薩應世、殺身自若、以謀衆生安寧、老僧托公以了殘生、不料先我一著藏迹、世相難期、空華易落、一笑翻身、兜率相見、山僧未後句子更欲提撕

菩提樹秀鐵舟寺 優曇華開全生庵 喝

鐵舟居士てつしゆこの如ごときは眞しんに生死しじゆを明あきらめ得えた人ひとと謂いふべきである。

後編 不去來

## 穆山和尚の遊女賛

禪門の耆宿、洞宗の管長として明治時代に頗る上古の風規を擧揚し、亦今時の樞要を宣説して禪風一世を風靡したる西有穆山和尚は活殺自在の面目、時に流水を琴とするの風流があつた。曾つて人あり、狂畫の達磨と遊君對話の圖に賛を求めた、和尚破顔一番

「九年面壁何のその、妾しや十年憂き勤め、煩惱菩提の二筋に、迷はぬ誠の一筋を、かて、三筋て日を暮らし、糸が切れたら成佛と、客の相手に南る阿彌陀、濟度なさととなさらぬは、それはあなたの御量見、外に餘念は無い哩ナ」  
八十一歳の時、汽車で碓氷峠の難所を通られたことがある。其トンネル中は眠つて居られたが、輕井澤へ着いて見ると氣候が一しほ寒い、眠を醒して停車場の便所へ這入られたが、其時、侍者を顧みて一つの狂歌を示された。

トンネルをとんと眠つて二十六

醒めて小便、身は輕井澤

と、蓋し碓氷峠の隧道は廿六ヶ所である。

和尚また或る雨の日、一僧の馬車に乗らんとする状を見て

馬車に乗る坊さん見れば法衣着て

袖もバシヤ〜雨もバシヤ〜

と、又某氏の豆を送りたるに

豆て居る吾れに豆かと豆贈る

君も豆とは吾れ知られけり

と、横濱西有寺閑居後に於ける和尚は、金剛の法體老いて益々健かなりしも高齡九十  
遂に明治四十參年十二月四日午後二時廿五分眠るが如く平然として遷化せられた。未  
後の垂示に曰く

「老僧九十、言端語端、無末後句、月冷風寒。」

### 破竈打和尚

往時、支那に於て面白い傳説があつた。开は某所に珍らしき一個の竈があつて、諸  
人之に參詣し祈願すると、如何なる願望も必ず聞いて呉ると云ふので、日々の參拜  
者群を爲すのであつた。然るに附近に一人の禪僧があつた、氣骨稜々天を衝くが如き  
勢、件の竈の前に到り「正法に不思議なし、汝何者なれば衆人を惑はするぞ」と大喝  
一聲、件の竈を粉微塵に碎いて了ふた。

すると中より青衣黒顔の鬼神が現れて、和尚を恨めしさうに眺めて行衛知れずに遁  
げて了ふた。夫より件の和尚をば誰云ふとなく、破竈打和尚と稱するに至つたと云ふ  
ことが、或書の中に出て居る。元是れ蛙歩の泥沙に転するが如き一場の奇談に過ぎぬ  
のであるが、正法鼓吹の端的は佛魔も窺ひ得ざる機輪がなくてはならぬのである。

### 趙州狗子の話

趙州從稔和尚の所に僧あり問うて曰く「狗子に還て佛性ありや、也た無や」と、州曰く「無」僧曰く「一切衆生悉く佛性あり、狗子なるとしてか無なる」州曰く「渠に業識のありあるが爲めなり」又ある僧、趙州に問ふ「狗子に還て佛性ありや也た無しや」州曰く「有」僧曰く「既に有らば、なんとしてか却て這の皮袋に撞入す」州曰く「佗の知つて故らに犯すが爲めなり」といふ二則の公案からなり立て居る、之を通俗に譯すればかうである、涅槃經に「一切衆生悉く佛性、如來常住無有變易」といふてあつて、これは一切衆生悉く佛性の性を具へて居るから、如何に生死輪轉しても、如來の自性は常住にして變りは無といふことである、然るに牛馬狗猫の如きは、人間と違ひ、毛袋を被、或は角を載いて居るのはどうしたものであるといふのが疑問になつて、この僧は趙州に裁決を求めたところが、趙州は「無」と答へられた、しかるに他の一僧の問に對しては「有」と答られた、同一の問に對して、その答が異つて居るが、これは全體どうしたものぞ、こゝが數學の答のやうに、千人が千人同一でないのて、普通の常識分別を以て測るべからずであると、似而非禪師が、勿體振るところである。

### 黒田長政の參禪

黒田長政と云へば、戰國時代の一大名將であることは、何人もよく知つてゐることであるが、此人は常に大徳寺の春屋宗園和尚に咨參して宗乘に得る所あつて、和尚より印可を受け、會下の居士として重んぜられた、和尚が「黒田氏長政公は予に於いて支許の如し」と云はれてゐる、父孝高即ち如水圓清居士の畫像を作り、和尚の贊を求めた、和尚は喜んで贊を書かれたが、その畫像は今も傳はつてゐる、これに和尚が孝高長政に對する關係がよくわかる、長政は又自己の畫像を作り和尚の贊を求めた、こ

の畫像は長政が和尚に咨參してゐる圖で、和尚は竹篋を執りて、曲祿に倚りその前に長政が衣冠を着けて立ち向うてゐる、曲祿の横の下に狗が一匹走り出て、長政の顔を視てゐる、これは長政が狗子の話を咨參して印可を受けたから、その意を描いたものである、和尚はこの圖を見て一笑し、直に筆を執つて賛を書かれた、その賛の句は次の如くである。

吾家話頭、無隱乎爾、要知郝翁、問取狗子

次に長政がこの圖を作つて賛を求めた由來を書き添へ、八十二齡老衲春屋宗園と署し、印を二つ押された、戰國時代の名将等が各々宗師を訪うて禪を修してゐることは、傳記に見ゆるが、長政が自らこの様の圖を作つて賛を請ふた事實があり、その賛並に畫像が、今尙ほ墨痕淋漓として遺存し眼前に見るに至つて、大に感を深くするものである。

### 男尊女卑を主張した末山尼

末山は高安大愚禪師の神足と稱せられたる尼僧である、臨濟の嫡嗣志閑禪師が末山尼を訪うた時は非常なる勢であつた、末山は徐に「近離甚れの所ぞ」と問ふ、師曰く「路口」末山は路口といへる辭を捉へて「何ぞ蓋却し來らざる」路口杯といふ口を蓋うて一切の是非得失を離却せば可ならんと云うた。師は是に於て末山の非凡なるを知り深く敬禮を行ひ、語を改めて「如何なるか是れ末山」末山の宗旨如何との問である末山は直ちに之に答へて「不露頂」末山の宗旨は頂が見へぬ、向上向下世間出世間等の論量を超えて居ると云ふた、師は更に「如何なるか是れ末山の主」末山の主人公はどうかと問ふた、すると「男女の相に非ず」と答へた、師は更に進んで「何ぞ變じ去らざる」變成男子刹那成佛の法門を試みた。然るに末山は元より身相の執著なき佛向上に安住し居るを以て「神に非ず鬼に非ず此の何をか變ぜん」と云ふた怪物で無いから變不變の閑工夫は用不着である、男女は陰陽と相分にして天地の徳を有して居る、女人なくば男兒もあるべからず、此天地ありて男女あり、男女の性は一切萬物の上に

男尊女卑を主張した末山尼

悉く備はれり、此兩性の上に妄りに尊卑の別を附すべきの理なしとの見識である。

### 吝嗇の女に説法した黙仙和尚

日置黙仙和尚嘗て丹波の或る寺へ住職して居た頃、山本新助と云ふ男があつて、一代の中に多くの財産を貯へた人であるが、自分は相當に財産か出来たから、貴人紳士と交際を結ばうと思ひ、種々と其手段方法を講じて居るが、其妻は至つての吝嗇家、何かと云ふとやれ費用がかかる、物要がすると云ふ見幕、何うも思ふやうに交際が出来ぬので困つて居た、乃て一日和尚の處へ來て、「私の妻は餘り吝嗇で困りますから、何うか一つ説得して頂きたい」と云はれたので、和尚も左うかと承知はしたものの、これは一つ閉口した、まさか他人の妻女と差向ひて「貴女は吝嗇で不可ない」と云ふ譯にもゆかず、併し承知して居つて行かない譯にも行かぬので、兎に角新助方へ出かけて行つた。

さて愈々彼の妻女に遇うと、いきなり拳を握つて妻女の前へニエーッと突出し「若し此拳が始終斯うなつて居たら何うであらう、と問ふと、妻女は「それは不具です」と答へた、乃て和尚は「成程之れは不具で、丁度摺子木の看板見たやうなもの何の役にもたぬ」と云ふ、次に五指を開いて示し「それなら之れが始終斯うであつたら何うか」と切り込む、妻女は不思議な顔つきで「それも矢張り不具であります」と答へたから、和尚すかさず「左様、之も矢張り不具である、それだから此五指握りづめて轉んでもたゞは起きないと云ふのも悪い、又始終開き放しても不可ない……」と説き出すと、主人の新助殿、和尚の説法が終らぬ中に横合から妻女に向つて「喃、これ菩提寺の和尚さんも彼様仰しやるのだから、これからはまあ之れ位にしてナア」と五指を半ば開いて示し、それ一同笑つて話が済んだとのことである。

### オー咽せたかとコウセン和尚

オー咽せたかとコウセン和尚

曾て洪川和尚の處へ或る雲水僧が來て「久しくコウセンと響く、麥コウセンか米コウセンか」と問ふと、洪川和尚は「何方であるか嘗めて見よ」と云ふた、乃て僧は何を此和尚……と云ふ權幕でカーッと大喝一聲した、時に洪川和尚そんなこととて面喰つて引込むやうなものぢやない、忽ち其僧の背を撫て、「オー咽せたか〜」と云ふたと云ふことが口碑に残つて居る、洪川和尚も亦作家の漢と云ふべきである。

### 宮路宗海の發憤動機

市内小石川白山側に道場を構へて、ドツシリした體軀を白綸子の座布團に載せ、何時も莞爾として一日數十名の居士大姉を接待し、禪書を講じては多くの學生の心臆を奪ふ、一見如何にも禪僧らしい師の風采は他に多く見られない。和尚は釋宗演師の法兄として鎌倉禪に異彩を放つた洪川禪師の法を嗣ひた人であるが、聽く所によれば師の洪川老漢はいつも釋師の才學をのみ愛して、自分は兎角圏外にされる、當時和尚

の胸中は訴ふべき人もなく、奮然として一杖一笠に身を托して修行の途に上つたのである。これがやがて今日の圓滿なる人格を築き師席を董すの光榮を得て、近代珍らしき高德と稱するに至つたのである、師は常に人に告げて「佛法と云うても、別に外には無いぞ、貴方がたが種々の境に臨んで喜んだり、怒つたりして居る夫れ其物ぢや、毎度云ふ通り盗人を捕へて見れば吾が子なりて、皆様の日用の業務に従事する當體より外にはない」と言はれる様子は、いかなる人も其頭を擡げ得ざる有難さを感じるに至るのである。

### 遊女勝山の禪機

元祿時代の勝山齋の元祖、勝山大夫彼は新吉原の遊女巴屋にありて、名を勝山と言ふた絶世の美人であつた。其當時の風儀と見へ遊女自身で揚屋まで客を迎へて行くを揚屋入りと言ふので例の外八文字を踏むのである、殊に此勝山の道中は恰も楊柳の風



に舞ふが如く蝶の花に遊ぶが如く優にやさしき其中に自然と勇氣の顯れて凛々しく随分な見物で在た、處が當時の俠客、駒四郎兵衛、之を面憎しと思ひ、彼が心中を試んものと道中に待ち受け二尺八寸の名刀を引き抜き「太夫これは」と頂上より切り下した、然るに勝山、自若として毫も動せず、莞爾と微笑つゝ徐に四郎兵衛を見返り「酒落深い人やのう」と言ひ捨て少しも驚さし様子なく平然として例の通り、しづくゝと道中をし其島田齧の元結のふつりと切れて前後一つに成たのを其儘其時より結び通したのが際分一時流行したと云ふ、此活機用も即ち禪機の一片ではあるまいか。

鹽山稜隊と但馬の月庵

鹽山稜隊が但馬の月庵を組み伏せ馬乗りを跨つて首を切らんとして見れば甲冑の下に袈裟を着けて居た故、直に「汝は何宗なりや」と問ふた、すると「月と見て指すと勿れ」と答へた、又上より「如何なるか是れ白刃上の一句」と問うた、下より「香

爐上一點の雪」と答へた、又上より「消えて後作嬰生」と問うた、すると「とくれば同じ谷川の水」で何の仔細はないと答へた、流石の稜隊も月庵を殺すは惜しきことなりとて遂に勝負を止めたと云ふは世人の能く知る名高き話であるが、之れも禪機の活妙用と言はねばならぬ。

宿を貸すぞや阿彌陀殿

世に洞門の奇僧を食桃水の名を知らぬものは殆どない、彼れの生國は筑後、晩年に至りて、京都東山なる清水觀音の下、安井門跡の裏に多くの乞食の群に入り、其身には僅かに襤褸が肩にかゝつて居るのみで、背には破れた法衣一枚、手に破れ腕と一個の囊とを携へて、毎日乞食と交つて談笑して居つた。後に瓢然去つて大津の驛に至り草鞋を齧いて居つた事がある、其時に或人が知識であるとは知る由もなく、親切に「之れから追々と年寄れば定めて行末の案じられる事もあらん」と思ひ、彌陀の像を

一幅彼れ與へて、「朝な夕な禮拜致しなさい」とすゝめた。和尚は喜んで之れを受け、破れ小屋の中に掛けて、即吟一首を書して曰く

狭けれど宿をかすぞや阿彌陀殿

御生ねがふと思召すなよ

とやつた。時に軸を與へた人は之れを見て大に驚き、其名を問へども答へない。其人恐れ多しと、口に稱名した處が和尚は再び筆を取りて書して曰く

念佛も強ひて申すはいらぬ事

若し極樂を通り過ぎては

### 南條博士と鳳潭の話

梵文法華經を完成して、世界の學界に貢獻された南條文雄師は克己修養の龜鑑として、幼少の折に母より聞きし鳳潭の話が、非常に深く感じて今に至る迄忘れませぬと

云ふて居られる。幼少寺小屋に通學される時より、青年時代に至つても少しく横着すると、母さんは「鳳潭の話を忘れましたか」と云ふては師を叱正されたとの事である。さてその鳳潭の話と云ふは、昔し比叡山に大學者があつて佛典の講釋を始めた。初めの間は流石の大講堂も一杯の聽講者であつたが、何分講義が六ヶしいので追々聽者が減ずるばかり、最後に残つたのは年尙若き一人の僧侶、其名を鳳潭と云ふ。ソコで講者は鳳潭を顧みて「貴殿一人のみでは如何にも張合がなさ過るから暫く時期の到來迄講座を休まう」と謂はれた、此時鳳潭は「然らば明日は多くの連を拵へて参りますから、是非共お續けを願ひたい」と頼んで置いて其日は歸つた。

翌日先生大得意、本日は定めし多勢の聽者が鳳潭に連られ参つて居ることならんと講堂に出て見れば、居るも居つたり鳳潭只一人、其四周には幾多の伏見人形が一面に頭を揃へて並んで居る、講師も事の意外に鳳潭を咎めると、彼は平氣で「先生の講義の初めに集まつた多くの人々は、恰もこの伏見人形同様、頭のみ揃つても講義が耳の

孔には通じなかつたやうに思ひます、夫でも先生は私一人では張合がないと仰しや  
るので、本日斯くも頭數のみは並べました、併し私は假令如何なる出来事があつて  
も必ず講釋の終へる迄は参ります」と嚴然と言ひ放つた、其決心に感じて件の講師は  
鳳潭一人の爲に永く講義を續けられたと云ふのである。  
賢母が些子の鋒銚も泥團を弄するの漢には徹底しない、博士が至誠の孝心と、愛子  
を思ふ慈母の情と兩々相合うて初めて一場の美談とはなつたのである。

吉田松陰の生死觀

松陰の獄中にありて書を認めたる數は實に澤山であるが、其中で遺言狀とも云ふ可  
きものに左の如く記してある。

兩北堂様、随分御氣體御厭ひ專一に奉 存 候私誅せられ候へ共首まで葬り呉れ候  
人あれば、未だ天下の人には棄られ申さずと、御一笑奉願上候、吳々も人を恨まん

よりは、自ら勤むること肝要に御座候、私首は江戸に葬り、家祭には私平生用ひ候  
硯と去年十月六日呈上仕 候書とを神主と共に被成候様願上候、硯は巳酉の七月  
赤馬廻浦候節、買取りしなり、十年餘著述を助けたる功臣なり、松陰二十回とのみ  
御記し奉 願候。

如何にも死を視ること飯するが如き趣きがあるてはないか。又彼が獄中より其妹に  
與へたる書を読む時には、その平常の修養の程を知る事が出来るのである曰く

(前略)さて其死なぬと申すは、近く申さば釋迦の孔子のと申す御方に候、今日まで  
生て御座る故、人が尊みもすれば、有りがたがりも、おそれもする、果して死なぬ  
のでは無いが、その人なれば細目も、人屋も首の坐も、前に申す觀音經の通りて  
は御坐らぬか、楠正成公であるの、大石良雄であるのと申す人には、刃ものにて身  
を失はれ候へ共、今以て生て御坐るのは、刃の断々に折れた證據である、さて又、  
禍福如繩と云ふことを御悟りがよろしく候、禍は福の種、福は禍の種にて候、人

間は萬事塞翁の馬の如きものと御心得置かれ度ものに御座候。

又、彼れが或時品川彌三郎に與へたる書中に曰く

生死の悟りが開けぬと云ふは至愚なり、詳かに云はん、十七八の死が惜しければ、三十の死も惜し、八九十百に至りても是で足りたと云ふことなし、彼の小虫の如く、半年の命のものあり。是以て短とせず、天地の悠久に比せば、松柏も一時の蠅の如し、只伯夷の如き人は固より、漢唐明を経、清に至りて未だ滅せず、若當時大公望の恩に感じて西山に餓死せずば、百迄死せずとも短命と云ふべし、何年限り生たれば氣が濟むとか、さきの目途でもあることか、浦島、武内も今は死人なり、人間僅かに五十年、人生七十古來稀なり、何か腹のいへる様な事をやつて死なねば成佛がてきぬぞ云々。

と世に吉田松陰の名を知るものは多くあるけれども、其の心を知るものに至つては甚だ少い、右の書その一分を悟つて餘りあるてはないか。

### 行履自在の折居光輪

其徳望は天際の如く、盡法界を吾家として無頓着なる風規に名を得たる、折居光輪和尚は曹洞宗大學林教頭として、又近時稀に見る禪門の偉傑であつた。和尚會て鳥羽の常安寺に住職して居る時には、常に學道を奨勵して祖祿や諸經の講義をなし、故に其座下にはいつも三四十人の雲水が居た。之等の雲水は日々孜孜として研究に餘念なかつた、それ故に和尚は、授戒會や結制等の請待を好まず、只一意専心雲水の教育にのみ勤めて居つた人である。

或日のこと粥後、突然雲水に向つて言はるゝには、「小衲は此度大學林の教頭に任せられたから、只今すぐに行かねばならぬ」と云つて、徒弟の百之長老を連れて、其儘上京の途についたのである。事務の依頼や後事の附托及び衆僧の出入等に關しては、何等一言も無くして出た、其無頓着さ加減と來ては到底凡人の眞似の出來ざる處、時